增補雅言集覽

三十二

813.6
I619g
Wxd

813.6
I619g
Nnf

国立国会図書館
41.3.31

691348

増補雅言集覽卷之卅二

石川雅望 集
中島廣足 補

○於の部

おと 音(源帚木)卅九 ゐそよきぬのさわりておとはもたてぢ

おとせぬ ○音すゑ出す

補 おと 鳥 ニ(躬恒集)「いづらなる山はあるらんかりがねのおとき丶たらく聞ゆか るゐか(千載)旅雅光 「さよふゐき雲ゐのゐりもおとにあり我ひとりやいたびのそら なる(同)戀四二條院 「たれもよもまざき丶そめどうぐひその君はのこそおとしむど むれ

補 おどろ(まはゐ丶み)後鳥羽院「おく山のおどろがしたもふみ迷はてみちあるよ ぞと人はゝらせん(枕)三おどろなる垣ねなどは(散木)「けふくれば一ごろは見ゆ る山がつのおどろの髪もあふひゐけ丶り(同)「ふ一つけ一おどろの下はそむもえ の心をさなき身をいゐにせん(後拾)釋教(小大君集)枕をおとしてまゐり出れば書 つく「道一をやおどろのかゝはならされてつもれるゐくそくさまくらかれ(月詣)

雑下公朝重時「あさひ山おどろゲーたるきえのこる雪やさゲ身のいのちあるらん（風雅）雑上

おどろへ（源わこの紫）廿三いといとうおどろへるけりとてゆゝーとおゲーめーたり（同さのき）四十老おどろへたる人ざる（同あけまき）五十。大君心今一とせふるとせあらばおどろへまさり補（好忠集）「戀さびてわゲゆふ帶のほど見れば身いおきまでにおどろへるけり（山家）上「玉ゥけー花のゥつらもおどろへて霜をいさゞくをみなへーゥお（源帚木）六時世うつろひて覺えおどろへぬれば（古）雑下たのむら「おもひきやひなのさゥれるおどろへてあまのおもたぎいさりせんとい（源さゥき）あきのむおみおおどろへつゝあさちゲ原もゥれ〳〵なるむーの音る補（万）十二、十二「我よもひーおどろへぬれば白たへの袖のなれるー君をーぞおもふ（金葉）詞書やせおどろへて（千載）戀五崇德院「おゲくまにかゞみのかげもおどろへぬちぎりーことのかたるのさゥい

おどろへ体の語（源竹川）初内々の御たゥらものらうー給ふ所々その方のおどろへいあけれど

おどろへゲさき（空穗くゥ開）中、四十一まゥおひるいおどゞの召仕ひ給ひー人のよき若人おりー猶おどろへがたき右近といふおん出來てつゥうまつりける

おどろゥを（源桐つぼ）廿九御おゝろたへ有ておどろゥさせ給ふ（同さつ音）十三さるべきさゥ〳〵いうちわをれたらんおとものおどろゥー給へり（同あふひ）四十九かよひ給ひー所々よりいうらめーげるおどろゥー聞え給ひおどをればいとをーとおゲすもあれど（同末つむ）三荻のもゆさりぬべき風の便りあるときいおどろゥー給ふをりもあるべー（同紅葉賀）十八おちやとの給へどおどろゥを（同わこの）上、六十一おおたらん事をゲおどろゥーなどもものー給いんおん嬉ーゥるべき○巳下人のいねたるをおすにいふ詞（同若紫）四十六うたておどろゥい給いドおいで御めさまー聞えおん云々君い何心もおくね給へるをいざきおどろゥー給ふるおどろきて宮の御むゥへにおいーさりとねおびれておゲーたり（宇治拾）一ノ十七よひのつれゞーるいざゥいもちひせんといひけるを云々かたゞーによりてねさるよーるて出るをまちけるるをそでるーいたーさるさまるてひーめさあひたり此ちでさためておどろゥさんをらんと待るたるる僧の物申さふらいんおどろゥせ給へといふをうれーとい思へども補（風雅）戀四順德院「さをれんとおもふいおのゲ心るてたゲおどろゥに泪あるらん（新後拾）戀五太上天皇「心よりかたるちぎりの末あれゲおどろゥーてもかひやあゥらん

○補 おどろかされ（源藤のうらい）廿三 紅葉のいろにおどろかされてわさり給へり（同あのー）四十七 あらぎそらーとおぎーへおぎりあれバおどろかされ給て

おどろかーきこゑ（空穂後のけ）上 御門琴どゆをこゝろみ給ふまおどろかーきあるいでおどろき給ひて

補 おどろのみち 蘇路（續古）雑下 爲定 「あとあれバおどろの道もふみそめつ今行ぎゑのまよゝぎもげあ（夫）廿一 爲實 「かぎげのゝおどろの道の菊の花つみおかーあき身をバあとゑれ（拾員）下 「引ぎつるさめーもかあーかきつめーおどろのみちのもとのくさ葉ぞ（拾玉）五 「あとあらドわーのみやまの法の道おどろのつゆを君ぢらゝぎゝ（拾愚）上 「かりころもおどろのみちも立かへり打ちるみゆき野風さむけー（同）同 「いく春の霞のーたまうづもれておどろの道のあとをとふらん（拾愚）下（新後）神祇 る（新） 「うづもれーおどろの道を尋ねてぞふるき行幸の跡もとひねん（新後撰）神祇、前太政大臣家定 「過ぬけぞ忘れぬものを春日野のおどろまあまる露のめぐみゝ（同）雑上 實泰 「ぎきつる跡にまかせん春日野のおどろの道ゝ雪ふかくとも（風雅）冬 實敬 「ふりぢつる我をもぎつる春日野やおどろの道の霜のーた草（同）雑上 家隆 「さらちねのあとやむかーまあれあまーおどろ比道の春まあゝぎバ（新千）雑上 爲道 「祈るぞよおどろの道の春

雨まふりにー代々のおおドめぐみを（同）同 爲藤 「ひぢりかく野べのおどろの道分てあげるぞ友ときく春もげあ（同）雑中 資明 「老ぢつるおどろの道のーた草ゝ春のめぐみまあふかひもあーかへし 爲定 「おもひーれめぐみをたのむ春にたまあぢぬおどろの道のーた草（新拾）雑上 資明 「位山おどろの道もゆどゝゆーぢあの外かるみねのーひーバ（同）同 定資 「春日野やくもらぬ月の影かれバおどろの道のあとのまよゝぎ（新續古）雑上 實名 「春日野やおかドおどろの道まのみわかあもゑれも年をつみつゝ（新古）神祇 俊成 「春日野のおどろの道のうもれ水末ざま神のかるーあらゝせ（尾張の家つと）ま大臣を棘路といふ故也

おどろ〜〜く（源東や）十三 大臣まおらんそくらうをとらんかどぞあまりおどろ〜〜き事と耳とゞまりける（同あふひ）十九 つく〜とふーかやみ給ふを宮人いをドき大事まて御いのりかどさまド〜つうまつるおどろ〜〜きさままゝゝあらぎそこもうとおくゑづらひて月日を過ー給ふ（枕）三ノ十四 人まおぢらるゝうへのきぬもたおどろ〜〜くたちさまよふも（源橋姫）卅四 いであかおとド〜〜例のおどろおどろーき聖ことぢをもてゝーゲかとて笑給ふ（同やとり木）四十 御そどもをいとゞ匂ゝ（イナシ）ーそへ給へるゝあまりおどろ〜〜きまであるま（空穂くら開）上八十五 ひとりま侍り

ーものいとおどろ〳〵しきさせさせめりおやくの人ぞいさづらはありぬとおぢ侍りー（同 樓の上）下、四 十四 きんを奉りーにその音例のことはもはをひゞきよくおどろ〳〵ーゝりーゝゞ（源夕ゝのほ）卅よるの聲ゝおどろ〳〵ー 補（枕）三、六 くその木ゝこだちおほゝる所はもあとはまゝらひらひたてらをおどろ〳〵ーきおもひやりなどうとまーきを（狹）四、下 心さをぎーてうれーきはむねさへおどろ〳〵ーくなるも人さろき御心あり（源 玉葛）廿一 うへゝおゝーまますやといとおどろ〳〵ーくあく（同ゝゝり火）三 折まつおどろ〳〵ーゝらぬほどはおきて

おどろ〳〵ーう（源をとめ）五 四 十春の御ーつらひゝ此頃はあゝねどいと心ことあり御車十五御前四位五位ゲちはて云々何でともおどろ〳〵ーういゝめーき事ゝあー（蜻蛉日記）一 そさかき人をよびいでゝ云々と云おきて父の出けるをなゝちはむひ入ておどろ〳〵ーうおく子ゝおぞ〳〵といへどいらへもせで（源 帚木）十 六 目はをえぬ鬼の顔などのおどろ〳〵ーうつくりたるものゝ（同）十 九 および一つを引よせてくひて侍りーをおどろ〳〵ーうゝこちて（同うつせみ）九 戸をやをらおーあくるは老たるでだちの聲はてあれゝさそとおどろ〳〵ーうとふ（枕）四、十七 夜いさくふけて門おどろ〳〵ーくたゝゝば（同）七、三 十こゝさそおどろ〳〵ーうきむやゝあるゝといふは

（源やとり木）四 十 いとたふとくせさせ給へりはるをよろあびきこえ給へるさまのおどろ〳〵ーうゝあらねどげはおもひーり給へるなめりゝー（空穗 樓の上）上 九 。カヲモリ 歌 ゝ云々と思ひ給ふれゝばまゝり過ぬるかもらよりなんとぞおどろ〳〵ーうたゝゝゝせての給へり

おどろく（源 桐つぼ）六 あさまーきまでめをおどろゝーー給ふ（古事記）上ノ 十四 天照大御神聞驚而（空穗 祭の使）十 八 仲澄 藤侍從よびにやれゝーー深きちぎりある人ゝよーある折をもぐさぬぞよきあどの給へゝ 仲スミ おどろきての給ひつゝゝーたれば（同 吹上）下 八 けさつゝさのまつりこと人あつゝさゲゝさり申つるにおどろきてなん俄に出さち侍る（蜻蛉日記）下、中 あくれゝば五日の曉はせうとたる人ほゝよりきていづらけふのさほうゝあどゝおそうゝつゝうまつるよるーつるこそよはれおどいふはおどろきてーやうぶふくあれゝば（土佐日記）おどろきてよみてんやゝ（兼盛集）廿 四 「うぐひそのもつ音はけふゝおどろきてもるの山べはとりくらーてん（源うつせみ）十 小君ちゝくふーたるをおこーー給へゝうーろめさうおもひつゝねはれゝばふとおどろきぬ（古事記）上ノ 廿八 其所寢大神聞驚而

おどろきうま（落くぼ）一 おどろき馬のやうに手をふれ給ひそ

おとよとつる（古）戀一、よみ人一らす「よーの川岩きりとゐー行水の音よいたてゞこひいーぬとも（同）戀三、よみ人一らす「よーの川水のこゝろいむやくともたきのおとにいたてゞとぞおもふ

おとよきく（古）戀四、よみ人一らす「あひそぎゞこひーき事もおからまー音よぞ人をきくべかりける（同）戀一貫之「あふ事ゝ雲ゐもるらよある神のおとよきゝつゝ戀わたるらな（源帚木）卅八音にきゝつる御有様を見奉りつる夕よこそめでたけれとそゝりにいふ（同まほろー）七猶音にきゝて思ひやる事のかさいかるよりも（同あけまき）五十音よきゝー御心のゐどーるきよやとおゝろおられて

おとよーる（新千）戀二みつね「あふ事をいつーらとのそまつ風の音よーられてまひわたるらな（古）戀三、よみ人一らす「山ーかの音羽の山のおとよざよ人のーるべくとげこひめらも

おとゞ御殿ナリ（源わゐ紫）四十八おとゞのつくりざま（同のわき）七木の枝などのをるゝ音もいとうたてありおとゞの耳さへのあるまゞく吹ちらそよ（同匂宮）九きさいの宮たちもとよりおなゞおとゞよてみやたちもろともおひ出あそび給ひー御もて

○よるのおとゞ（源桐つぼ）十八人めをおゆーてよるのおとゞよいらせ給ひてもまどろませ給ふ事かたー

おとゞや（今昔物）其日よりぬれゞ右近の馬場の大臣屋よいたりぬ

○おゞおとゞ（源葵）卅二あおいとほーやおゞおとゞのうへないたうろめさまひそ（同玉のつち）十心をやぶらゞとおゞおとゞ出あふ（榮日のけのゐつち）九おゆさいーやうの君おどいふ人をゞおとゞなどいひつけ給ひおよびをさーいひつれど（源朝のは）十三。源内侍の事院のうへいおゞおとゞとわらいせたまひーかどなのり出るよぞ（狹）一、下十九おとゞの御さいもひよてあそおもせめ云々（源玉鬘）十心をやぶらゞとておゞおとゞいであふ（落くぼ）めのとのおとゞとこそいひーがいできて補（源玉鬘）廿小貳北方まづおとゞいおもにや（同）十二おびえておとゞいろもおくなりぬ

おとゝこのゐみ（空穗初秋）上、五十二更よ親子ともこえゞ只ひとつふさつのおとゝあのゐそよこえたり

おとゝひ（顯宗紀）八倭者彼彼茅原澪茅原弟日僕是也。御兄弟ヲ申セリ（万）一ノ廿六「あられうつあらゞを松原をゝの江の弟日娘とゝれどあゐぬゐも○これい姉妹の遊行の女婦おゞがまゐりたるをもてよゝ給へるなり

おとゝひ（源うつ蟬）十おとゝひよりそらをやゝていとわりなれば

おとり　劣（空穂樓の上）下、五十五わらはのたゞをおゝこれハ劣りなる（同同）廿九むらゝの朝臣ハ七人の山人の中のおとりの手をゝひきとり給ひけれ（源東や）五まきゝらてんのあまやゝなるこゝろをへまさりてこゆるものをハ此御ゐさまとゝりかくゝておとりのをこれをんよきとてみをれば（同きりつぼ）十九やゝこのうつゝまハなをおとりゝり

おとりをら（源とこ夏）十五おとりをらをれぞあゝゝのおもとのうゝ出（同手習）六十三かのひゝりのゝこの御娘ハふたりと聞ゝを兵部卿の宮の北のかたハいつれぞとの給へば此大將どのゝ御のちのハおとりをらをるべゝことゝゝくもゝてをゝ給ハざりけるを云々（同みゆき）廿七きゝゝばられもおとりをらなりとおうをゝ多まの給へば

おとりのさま。ツカヒ人（源よもきふ）八わゞかくおとりのさまにてあをづらハゝくおもれさりゝも

おとる　劣る（古）春下、典侍沿子朝臣「ちるむなのなくまゝとまるものをらばわれうぐひすまおとらまゝやハ（源桐つぼ）三さゝあさりて世の覺えむをやゝをる御ゝさにもおとらぬ（同帚木）六我ハゞをゝふて家の内をゝさり人におとらゞとおもへる（土佐日記）此人々の心さゝハ此海まもおとらざるべし

補（万代）馬内侍「やどりへてまほひおとるを梅花むゝゝわをれぬ人もあるまま

おとゞゞひ　頤（枕）十一、廿二かたゝゞへおとゝて夜ふゝくゝへる寒き事いとさりおくおとゞひおどもみを落ぬべきをらうゞて來つきて補（宇治拾）諸人おとゞひをむかちてこらひたるま（同）三、十八おとゞひのゝたををゞりかゝりて食て二さびみたびをゝり打ふり（同）八、二ひゞさの上を又おとゞひに繩まてゝらゞつけて

補　おとゞひをとく（續古事談）主上よりむゞめて見る人おとゞひをとゝをといふ事をゝ

おとづれ　り（源夕のほ）五十右近だまおとづれねば（同末つむ）廿八まめやゝをるさままつねまおとづれ給ふ（同玉のうゝ）三たづねても音づれ聞えざりゝほどま（伊勢物）十七段とゝでろおとづれざりをる人の櫻のさゝりに見まきたりければ補（拾玉）三「雲の上につるのもろ聲おとづれて哀のゞけき春の空ゝを（新後拾）春上、式子内親王「袖の上にのきぬのうめのおとづれてまくらまきゆるうたゝねのめめ（宇治拾）二、八。用經ゞ心れ中まに思ひけるやうこれ我つゝさのゝこまに奉りておとづり奉らんと思ひて（同）同七用經ハつゝさのさくこんをれば此ゝこのもとまもきてをんおとづりける

おとね　乙子。下ノ子日（空穂くら開）下ノ五十二ノ忌ナリ大將殿まいり廿七日まいでさるおとねまなん嵯峨のゐんまゐ御賀まゐらせんと給ひける（同國讓）下ノ四十廿五日に出つるおとねいと犬宮の御百日まあさりけり（同）四十一「もゝからいれふとしらせつおとねそぞかぞへて千代となもよひの松○廣足按百日をばもふとならせつあるべし（同）四十二「姫まついおとねのらぎりらぞへつゝちとせのまついもぎとしらおん（空穂菊の宴）十九かくてきさいの宮の賀正月廿七日まいでくるおとねまあんつらまつり給ひける

おとな（源みのり）十。紫匂へ遺言おとなまりあり給ひあがこゝまもを給ひて云々（同玉葛）廿一姫ぎもおとなまりておいしまも（同桐つは）冊一おとなまり給ひてのちいありしやうまもその内まもいれ給むぎ○（新釋）三元服ヨリ後ヲオトナトイフトミエタリ此次ノ文ニ今ハヲサナキ御ホドニ罪ナク覺シテト云タレバコヽハ齡ニカカハラズ元服ノ後ナイフ也○雅望云三代實錄ノ人トナリ玉フトイヘルモ同ジカルベシ（伊勢物）廿三段おとなまりまければ（源わの紫）八。紫ノ上ノ事チカキテ扱きよゞなるおとなふさりばらり云々此ゐたるおとな詞云々とて立てゆく髪ゆるららまいとなぐくめやもき人なめり○少納言ノ乳母ノフチ云（枕）八三おとなどものいふとてふと

もきゝいれねば（同夕のは）十ものまめやらあるおとなをらくおもふもゞまをこげましう補（三代實錄）四十一元慶六年正月二日天皇加元服云々七日庚戌宣制曰云々天皇幼少久御座止伊倍止毛親王等乎始天臣等之相穴奈比奉利相扶奉仁依天食國之内無事久平介久之天御冠加賜比人止成賜奴○コノ人トナリ玉ヒヌトアルモ元服シテオトナニナリ玉フト同ジコヽロナルベシ

補　おとなをむな（住吉物）侍從いおとな女まてよろづに大事の人まて

おとなゝしう（源あふひ）四十二おまへなるおとなゝしき人などいとりあしくてさとうちかきさる（落くぼ）一ノ冊二御くしらきくゞし給へどおとなゝしうつくろへど心ちあしとてたゞふしまふしぬ（源わの紫）十七おとなゝしうむづらしゞあるまつゝまれてとみまもえ打出給いぎ（空穂櫻の上）下ノ十六わら君いやとのさまへばおとなゝしくついゐたまへり（同さゝの院）冊三いとめやもくさうぞきてのゞり給へりたちもいとおとなゝしうきよゞなり（源紅葉賀）廿六猶忘れがたくもなるもりのかゝにおそあらめとおゞもにおとなゝしき人まこのくにげあきふるまひそしてもつけられんまといむづらしければ

おとなく（榮みえてぬ夢）四十二此ことらく音なくていよもやまゞと世人いひおもひ

さり（源まき柱）二いつーりとゐゞ殿にいだし奉らん事をいそぎ給へと云々いとほしさよ事づけ給ひて猶心のとりよなたらりあるさまよておとなくいづりさよも人のそーりうらみありるべくを云々（後）春上此花咲なんときにりあらぜせうそあせんといひれるをおとなく侍ければ（源匂みや）十六宰相中將いまけりさよておとなくまりでさまひよれるそ

おとなくて（狹）四下四十四おとなくて上のふとわたらせ給へば何とあくとりいれて中將いのきぬるに（同）三中れおき事よてもいりさりり人よ名をたて奉りて音なくてやまんゞいとふびんなる事なり

おとなぶ（源わのあ）下ノ百三大將いおやけゞたいやう〳〵おとなぶめれどりやうよあされびたるりさいもとよりーまぬよやあらむ○オトナビメクノ約カ

おとなぶる（濵松）四十六四若君りばりりおとなぶるあと（源をとめ）十二子のおとなぶるよ親のたちりいりーれ行事の云々

おとなでゝろ（狹）三下廿

おとなーく（源紅葉賀）十九おとなーくとあーていそりへもさらよいくまど（同みを）つくー）四十一にあり給へどそどより大きにおとなーうきよらよて補（宇治拾）一、廿八

おとなーき郎等をゝみきて云々おとなーき郎等のいふやう

おとなび（年ヨリ玉ヘルコト也）（源桐つぼ）廿五うちおとなびさまへるよ（同椎のもと）廿三ささぎき御らんぜーよいあらぬ手のけをあーおとなびまさりて（同帚木）十八人おとゝよ

もありすこーおとなびんよそへてまたあらぶ人おくあるべき（榮もふーて）二姫宮おとのおとなびさせ給へらんそどの御心おきてもゆりーりつるをと（源柏木）六おとなび給へれど猶もおやぎさるところつきて物笑ー給ふおとゞの云々（同さのき）十三御とーのそどよりいおとなびうつくーき御有さまよて補（源うす雲）三前齋宮のおとなびものー給そざよあそあなぐちよあつりひ聞ゆめれば

おとなびひ（源夕ぎほ）十九ある神よりもおとろゝーくふをとゞろりをりら白のおとも云々何のひゞきともきゝいれ給いぜいとあやーうめざまーきおとなひとのゝきき給ふ（同やとり木）七十一此あさりにおとなふをりあらん云々まざこゝよさーたへていおとないぜ侍めり（同末つむ）十三ふりよたるあさりこそおとなひ聞ゆる人もありりれ（同わの紫）十五うちそよめくおとなひあてたりありときゝたまひて（同帚木）廿五きぬのおとなひもら〳〵とーてわりきこゑどもよくりらぜ（新勅）雜一菅原孝標梅壺女御まうのぞり侍りけるおとなひもよそよきゝむべりて（神代紀）下ノ十一喧響此

云淤等娜比（源兼澄集）「こひつゝもふるやのつまのしのぶ草しのぶるやどにおとゝあふやされ（源まつ風）十六水のおとゝおひゝでとゞまゝう聞ゆ

おとゝあひいふ（源東や）三娘おほりときゝておま公達めく人々もおとゝあひいふいとあまゝあり

補 おとらゞまけゞ（榮音樂）一われもゝ〳〵とおとらゞまけゞとおもひたるけしきどもゝそゝし

おとむそめ（催馬樂）我門あやめの郡の大領のまおむそめといへ於止牟須女止古曾伊波女

おとうと。妹ヲサシテ（源蜻蛉）四十五此大將殿のおくなし給ひてし人い宮の御二條の北方の御おとうとおりけり（狹）一、上四只今の大きおとゞと聞えさせる御娘一條院の后の宮の御おとゝ東宮の御をさゝ（榮見とてぬ夢）廿一又一條の大きおとゞの御子の中將をぞわゞ子ゝし給ひて此北のかたの御おとうとをあいせ奉り給ひて云々（大和物）一廿六本院の北のかたの御おとうとのわらいあをおやつぶねといふ（枕）十一、みそのの内ゝ宮しゞいしや三四の君宮の妹殿のうへ宮の母君也其御おとうと母君の妹おり三所立おみておいしまさ（源帚木）四十五その姉君いあそんのおとうとやもたる（大和物）三ゝ

の北の方の御おとうと九の君をやゞてえ給いんとおゞしける（源花のえん）七女御の御おとうとたちゝこそいあらめ（日本紀）古者不言兄弟長幼女以男稱之兄以女稱妹（日本紀竟宴歌）（注）そのおとうと玉依ひめをとゞめてやしまむしむ云々○妹をいへり補（大和物）四故ゝやを所の御あねおほい子にあたり給けるおんいとらうらうしく歌よゝ給ふ事もおとうとゝさち御息所よりもまさりてなんいまはりはる

補 おとや（著聞）九ノ十七もやを射るゝ云々おとやゝて又あしの串をいてけり

おとまさり（空穗國讓）下ノ卅四。詞おとゝくら人の少將のおとまさりにおりまさられぬべうめるゝあたゞ今の上人いこれひとりおめりゝし

おとぎゝ（竹取）五世のおとぎゝもあいつはきわざおれば（万）五ノ廿六音ゝきゝめゝいまゞゝを（狹）一、上卅一岩きりとゞし侍るとも音聞もあるまゞき事と思ひしりされば よもゝぐるしき心のゞどい御らんせられゞ（躬恒集）卅四「いづこある山ゝあるらんかりがねのおと聞ゝらく聞ゆるゝか（源末つむ）十八此ゝゝうゞゝもむゝ世ゝたぐひなき御有樣のおとぎゝにつゝゆるし聞えておとろ〳〵しうもなゞりれを（清慎公集）「おとぎゝゝものおれゝける衣手いなみたとゝもゝふりやしぬらん（源東や）十四うち〳〵ゝあそかくおもへゞうのねとぎゝいゝりみの子ともおもひわりを云々 補（濱

松）三下　おとぎゝも見ぐるしきことゝおもへど

補　おとゝゝ（大和物）おもしゝこゝゝしくもとむれども音ゝゝもきこえぎ○文雄云山岡明阿云古本ゝおと耳と書たるをよゝあやまりてゝゝとせるなるべし云々廣足按此説中々ゝゝろしおとゝもゝゝゝも聞えぎといへるをかくいへる此頃の平言也こを例あしおといふりたいかさくあ也

おとしいれ（源手習）九人ゝみせでよる此川ゝおとしいれ給ひてよといきのしたゝいふ

おとしうけ（源東や）六十三そでのかさありながやゝゝ出たりけるゲ云々おとしうけれのたゝき所にそつれてひきいれ給ふ○（細）たゝそよりひきゝ所へくぐるさまありぎ

おとしたね　落胤（蜻蛉日記）上ててゝ生そのゝしり子さへ死ぬものゝ孫王のひげそさりしそこの落したね也いふゝひなくゝろき事限りあし

おとしたて　新六）信實のたこひ「あひみてのゝちのつらさのあゝつまぞおせども明れぬおとしたてゝあ

おとしむる（金葉）戀下俊頼「あやしきもうれしゝりけりおとしむるそのことのはゝかりるとおもへば

おどしぐさ（源紅葉賀）卅さゞさるべきをりのおどしぐさゝせんとぞおもひれる

おとしぶみ（頼政集）下ノ廿八おとし文やみしそれゝ我しさりしありとありしゝば

おとしあぶさぎ（源王葛）三さしもふゝき御心ざしありけるをたゝおとしあぶさぎとりしさゝめ給ふ御こゝろあげさなれば○注アブレサセズナリ溢ハ物ノアマルヤウノ心ナリ○今俗ニ落ブレトイフモ落アブレノ畧ナリ

おとしめ（源桐つぼ）四おとしめきぎをもとめ給ふ人ゝおそく（同同）廿五人もえおとしめ聞え給ゝねば（同帚木）七もてゝしづける娘おどのおとしめがさくおひ出るもあまたあるべし（同よもぎふ）七。北方ヒガメル心おのれをばおとしめたまひておもてぶせゝおぞしたりしゝぞ（同朝ぬぼ）廿三此數ゝもあらぎおとしめ給ふらんそのの人あそゝ

おとしめおと（源わのあ）下五十九あいおき御おとしめおとゝなんとて〳〵ゝたらざつそ

おとしめさま（源匂宮）十五いとそぐれてをしゝ夕に心をへおどもたらひておひ出給ふを世の覺えのおとしめざまなるべきしものくあさらしきと云々

おとひめぎそ（榮えつ花）十七おとひめぎそふさつそりしておいしませば（日

本紀竟宴）「てりまてるろやいたれぞとゝふまでにひろりとほれるきミゲおとひめ（榮さま〳〵の悦ひ）十六 源師ときこえ〜ゲ御おと姫ぎミをとりて養ひ奉り給ひ〜ありけり

おとせぬ（續古）戀二 朝光「山彦ゝこたふるゞまもあるものをおとせぬ人をまつゲくる〜さ（續後拾）雜中 寂蓮「山ざとゝともれんとやゝをそめ〜おとせぬ人を何うらむらん（伊勢物）十三段 むさ〜あぶとりきておこせてのち音もせぎなりまければ

○おともせぬ（和泉式部集）下「おともせで秋のをぎめくとゝでとまうきくもりとも〜らぎゲゐある（源をとめ）廿八 小侍從やさふらふとの給へど音もせぎ（拾）戀三 清正娘

冬よりひえの山まのゐりて春まで音せぬ人のもとまに

○おともせねば（枕）十一 八 つねまふをおこもる人の云々ゐどいひて又の日音もせねば云々 又の日ゝ雨いたうふる晝まで音もせねばむゲまおもひさえまけるゐど

おとを 落又 劣（源野分）十四 あへゞめるをゲたまこうちぎひきおとゝてねぢめをせさりの（花）衣架まりねたるをひきおろ〜てき給ふゐり（後）戀六 いたで〜のびねるをいりなるをりまりありねんあさりまりきておとゝける（玉葉）戀二 竹のをまに露おきさるりたりきたる扇をおとゝて侍りねるを和泉式部（源桐つぼ）ひとゝせの春宮の御

元服南殿まてありゝぎ〜きのよをゝ〜りゝ御ひゞきまおとさせ給ゝを（同とめ）五十五 今一方の御ねゝきもをさ〳〵おとゝ給ゝで（落くゝ）四 姫君十三まて御裳きせ奉り給ふ二郎君をもおとさゞとせさせ奉りたまふ（源帚木）五 人をゞおとゝめゐと（金葉）戀下 おとゝめてあもぎといふことをよめる「あや〜きもうれ〜りねりおとゝむる其ことのたまかゝるとおもへゞ（源帚木）廿六 ゐみたをもら〜おとゝ（同ほたる）十七 こちあくもきあえおとゝてねるりあ

おどね 令懼（源うき舟）六十二 此おど〜ゝ内舍人といふものぞきさる（枕）十二 一 打ねふりてゐたるをおどをとて（源帚木）十九 世をそむきぬべき身ゐめりゐどいひおど〜て（同）十八 いゝりでこるをりりのわざ〜ておど〜て（同をとめ）五 座をたちたまひなんゐどゝおぞ〜いふもいとをゝり〜（同夕顔）廿八 さやうのものまゝおぞされドとて 補（宇治拾）二 おぞ〜てを〜らせて云々あれおど〜てを〜らせん

おち 乙（空穗 祭の使）卅六 あをみやせてゆるぎいできて季房けふのミあめみの乙（オチ）まいらんとてまドりさり

おぢ 懼（榮松のしつえ）八 世の人ゐびき申おぢ聞えさせさり（源夕のほ）一 五十頭の君まおぢ聞えてやゲてゐてくたりけるにやとぞ思ひよりねる（落くほ）一 北の方いミ

ゞく心のあーくて云々おぢつゝゝ給へるとおんきゝはべると申せば（源夕ゝのほ）卅四
せんりゝなうおぢーおぢて（同帚木）十八かうあおぐちまーたげひおぢさる人おめり
（垂仁紀）悚恐（オヂカシコミ）（源さゝのき）卅六太子おぢたりといとゆるらりまうちぎーたるを（同夕
ゝのほ）廿五おぢたゞりて

○おぢわかゝく（枕）三ノ十四おぢわかゝく人のうちわたりのほそどのかとま（源わゝの
紫）卅九の給ふけたひのいとかつらーきそゝきなきこゝろまもいといさうもおぢぎ

○おぢつる（枕）一九あかおそろーとおどろきて云々何事ぞ生昌ゞいみゞくおぢつる
ゝととたせ給ふ

○おぢかー（竹取）おぢかきことする船人にもあるらな（雄略紀）怯（オヂナシ）補（空穂嵯峨院）
下九十九物まおぢかき人いりで前後ーらぎまどひけむ

補おぢおそれ（宇治拾）三くまのものどもおぢおそれさり

おぢおのゝく（清寧紀）慄然振怖（オヂオノヽキテ）

おち（拾）雜春（二六帖）（貫之集）「築されば川風いさくふく時ぞ波の花さへおちまさり
れる（古）春下高世「枝よりもあざまちりまー花かればおちても水のあととあそかれ

おちいる（源紅葉賀）廿二まらたいいたくくろゞおちいりていゞゞくたつれそゝけた

り（同うき舟）五十わたーー守ゞうまでのゞらゝ掉さーたづーておち入りたべりまはり

補おちた（落鼠ナリ）（源とこ夏）四朝臣やさやうのおち葉をゞまひろへ

おちまき（古）秋上遍昭「名まめでゝゝされるぞりぞをゞなへーわれ落まきと人まかた
るか

おちゞ（伊勢物）五十八段此女どもおちゞひろゝんといひければ「うちゞひておちゞひ
ろふときゞませばされも田づらにゆらまーものを（白文）十四兼遺穂（トレノオナホ）

おちとまる（源みをつくー）十五あよかくおとろへたる宮づらへ人かどのいたほの中
さづぬるまおちとまれる（同紅葉賀）廿八内侍ゝあさまーく覺えければおちとまれる

おちゝた（枕）四ノ十四お前の梅ゝ西ゝーろくひゞーゝ紅梅まてそこーおちゝたまなり
されど

おちゝゞ（落髪）（拾）戀一貫之「あさかくけづればつもるおち髪のゞざれてものをおも
ふころゝか

おちゝみ（落かそり）（源手習）四十五髪も少ー落かそりたる心ちすれぞ何むゝりもお
とろへぞ（同蓬生）五十我御くーのおちゞさりけるをとりあつめてゝつらまー給へるゞ
九尺よむゝりわていとさよらかるを

おちさる（源をとめ）十六 かきりはゝ給へる文どもの心をさおくおちさるをりも（同わかの浦）下、八十四 おちさる事もこそとおもひゝしりば

補 おちたるつき（新古）冬 清輔 「冬ゞれのもりの朽葉のゝものうへまおちさる月の影のさやけき（風雅）秋上 後京極 「物おもへとそるひさあらゝ木の間よりおちたる月にさをゝしりの聲（拾玉）四 「そむ月ゝのきのあやめまに影おちて有明の空まおくゆとゝぎは（同）五 「紅葉ふく風のさよりまに月おちて霜まおやめる庭の面りあ

おちつく（さらゝな日記）ゝらうゝてのやりて西山ゐる所まおちつき（濱松）二、十七 ゝ君ぐゝ奉りて里まそいそぎおちつきまれる

おちる（源桐つぼ）廿 女御も御心おちる給ひぬ（後）雜二 むゝりゝおゐゝ所に宮づゝへゝたべりける女の男まつきて人の國まおちるたりれるを（源若菜）上、七十五 おとゞも御あゝろおちる給ひぬ（同あけまき）卅六 心おちるて

おちるぬる（竹取）上 これを御子きゝてこゝらの日頃おもひびたべりつるあゝろゝけふなんおちるぬるとの給ひて

おちるる（狹）四、下四十七 常盤まゝへり給ひあゝろをゝゝおちるるまゝに（源明石）卅四 今ゝかくてよるべきぞゝゝと御心おちるるまつけて

補 おちぐさ（風雅）冬公泰 「御狩をるかさ山ゝげのおち草まゝくれもあへぎさつきゞはゝな

補 おちまふ（重之集）「最上川おちまふ瀧のゝらいとゝ山のまゆよりくるまぞありまる

補 おちまふみづ（散木）川の瀨のおちまふ水のゆく〳〵と

おちぶれ。おちあぶれの意也（夫）卅六 「あまさゝるひかの長ぢまに日ゝぎへておちぶれぬべき身をいゝません（源とし姫）卅七 行末遠き人ゝおちぶれてさはらゝんこと（空穗くら開）上、一十六 此御手ゝ病ある物おもひおちぶれさる人もこれをきけゞ（源手習）十二 いゝでさるゐかゝの人のをむあたりにかゝる人おちあぶれはん（同よもきふ）七 この姫君の母北の方のむらゝら世まおちぶれて受領の北の方まに成給へるありけり（同夢のうき橋）八 おぢあぶるべきゝぎりとゝ思ひ給へざりゝ

おちゆく（源みもき）十 何事につはても末にかれゞおちゆくけぢめこそやをくむべるめれ

補 おちを（万）十五、卅二 「おもひつゝぬれをゝりもとかぬたまの一よもおちをいめまゝ見ゆる（同）十三、十七 「今さらまあふとも君まあむめやもぬるよをおちをいめみ見えこ

そ(同)一ノ川隈の八十くまおちぞ
廿九

おり(源帚木)廿八皆下屋まおろしむべり給へるそ(枕)十二七おりーゝされおくらんと
の給へば(源わゝの紫)四いゝおりはんならんとくち〳〵いふおりてのぞくもあり
(同夕ゝほ)四引いれており給ふ(同わゝの紫)四七十西のたいまゝ御車よせておりたまふ
(同まほろー)四あはれのにーもさうゝまおるゝ女房おるべー(後)雜一藤原のさねき
ゞ藏人よりゝうむり給てあそ殿上まゝりおりなんとーける夜(源きりつほ)廿七そ
奉りゝへておりて拜ー給ふ(同同)廿九あゞはーよりおりてふたうー給ふ(同夕顔)四
馬よりそべりおりて(同末摘)廿二いとむづゝーくてやをらおりぬ(同すま)十八君も御
馬よりおり給ひて(土佐日記)廿八ゆあゝせんとてあたりのよろーねところへおりて

補(神武紀)取所入御船之楯而下立(オリタチ玉ヒキ)(土佐日記)下二月四日條歌人ゝそれ貝おりてひろも
む(散木)ゝゝさゝまゝりて舟よりおりて(源椎ゝの本)五いとをゝーう故ある宮な
れば人々心ーて舟よりおり給ふ

○おりゝたち(源朝顔)十五おりゝたちてせめ聞え給へど(空穗吹上)下ノ廿三舟どもゝめのこ
どもおりたちて(同菊の宴)下ノ四十おきためーゝらくれなゐの海そいでゝ黃おる泉ゝ
おりゝたちて(同あて宮)二ゝゝけくまのまうでやんでとなき上達部おりたちて(同

國もつり)中ノ十二七大德めーあるべーと殿原そのまうれー給ふ左大將そのいとまおくま
うけ給ふ右大將おりたちてまつりでとしー給ふ(蜻蛉日記)中ノ上「まーゝづのまーてはゝ
ぞふるものおらばおなゝ沼ゝぞおりもゝさちなん(重之集)九下司ゝあらぬ人の世の
中そわづらひて鍬をきとりておりたち(躬恒集)三十八「おりゝたちてうゑぞいありと
も小山田の秋のゝりまいあむんとぞおもふ(家持集)廿一「逢夜ーもわゝるとおもへ
ば天川おりたつよりぞうれーゝりける(伊勢集)廿三「身のうゝぶ事をもーらで川中
ゝおりたちぬべき心ちあそすれ(順集)廿六「おりたてばうらまでひつる袂ゆゑ何う
ちゝへに荒田おるらん(源夕ゝほ)十五わりおうやつれ給ひつゝ例おらぞおりゝたちて
ありき(同御法)十六いゝーへもゝおーとおぞにとゝもあまたゝ給ひー御身なれどい
とゝうおりゝさちていまだーり給いざりける事を(同あふひ)十七「袖ぬるゝこひぢと
ゝつハーりなゞらおりたつたでのみづゝらぞうき(同夕ゝほ)廿六人ゝもゝらさゝと
おもひ給ふれば(落くぼ)二ゝばりこゝろざーふゝきさまゝておりた
ちていたづらゝやなさんと(拾雜秋天暦御製)「七夕のうらやまーきゝ天の川こよひそ
ゝりいおりやたゝまー(後)戀二敏仲「わび人のそぞつてふおる涙川おりゝさちてこそぬ
れわゝりけれ返ー大輔「ふちせとも心もーらぞ涙ゞいおりやたつべきそでのぬるゝに

また敏仲「心こそ猶おりたゝんなみさ川うれしきせゝもあげれあふやと

○おりゐ（宇治拾）一、十三旅人のやどもとめけるゝ云々よきことやどり給へといへば こあおりゐゝけり（源闕や）三闕山ゝみなおりゐておゝゝこのしさゝ車どもかき おろし（古）羇旅あまの川といふ所の川のそとりゝおりゐて酒などのみけるついでゝ （伊勢物）九段その澤のそとりゝおりゐて（土佐日記）磯ゝおりゐてわゝれがさきこ とをいふ

○おりのぞり（土佐日記）下二月九日こな人舟のとまる所ゝ子をいたきつゝおりの ぞりに

おりべのつゝさ（新六）五（夫）十九光俊「もゝしきや大内山のうしとらゝおりべのつゝ さあや奉る

おりゐ（大和物）一今ゝおりゐ給ひなんとそるころ（源葵）五其夜齋院もおりゐ給ひ て后ぞらの女三宮ゐ給ひぬ補（伊勢集）かくて帝おりゐさせ給ひて三年といふゝ （大和物）一こゝどおりゐ給ひて又のとし

○おりゐのこゝろぞ（榮花山）卅九いみドけれどもおりゐの御門の御事ゝたゞ人のやう ゝこそありけれ（源わかな）上ノ廿五おりゐのみゝぞゝひとしく定まり給へれど

○おりゐさせ（源紅葉賀）卅一帝おりゐさせ給ふんの御心づゝひちゝうおりて

おりゐ（源てゝらひ）六十三かの女のさうぞく一くだりてうゞ侍るべきをせさせ給ひて んやおらにべき物ゝいそぎせさせむべりおんといふをきゝて（古）秋下せきを「霜のた て露のぬきこそよゝらゝし山のゝしきのおれゝばゝつちる

○おりゝく（金葉）秋俊頼「音羽山もみぢゝゝるらしあふ坂の關のそ川にゝしきおりゝ く（同）冬經信「こむろ山もこぢちるらしたび人の菅のそげさゝゝしきおりゝく

○おりざま（源あふひ）五十二御したゞさねゝ色もおりざまもよのつねおらぞ

○おりもの（源末つむ）卅三えびぞめのおりものゝこぞ

おりこ（神代紀）靈於箇美（豐後風土記）有蛇靈曰於箇美（万）二ノ十二「吾岡のおりこに いひてふらせたる雪のくざけしそこゝちりけん

おりぞ（源帚木）三おのづゝらこしまりもおりぞ（同同）廿七およなきとさえおりぞ さるものゝしおして

補 おりに 犯。此抄よていを（大和物）四ことの部ゝ入たり こと國の人のいゝでゝ此國のちをびおりに べきといひて（源若菜）下「くやしくぞ罪おりしけるあふひ草神のゆるせるのざし おらぬゝ（同まほろし）十六「おそのたいおもひそてゝし世おれどもあふひいなそや

つみおろにべき○文雄云をのかおとするいよろ〳〵らぜ○鈴屋説詔解一ノ十八

補 およる 寢（著聞）五ノ十三 つきをも御らんぜでおよるあれば此御ふをまゐらゐるよ

およをぜ

補 およつれ 妖言（万）三ノ十五、四、長歌 於余頭禮可わげきゝつる云々（同）十七、長歌 廿一 およつれのさいでとゐも

およぐ（源手習）六 池よおよぐいを山になく鹿をたよ 補（宇治拾）六ノ十九 大なる白馬浪の上をおよぎて

およぶ（狹）二ノ七 上大將の御ありさまぞ筆及ふべくもあらぜとてもていやり給ひよき（源帚木）七 なよろ〳〵げおよぶべきほどおらねば（同すま）廿 ゐり及び給ふまゝきをさめみゐいやうどまでも 補（宇治拾）一ノ一 廿 たゞそのころのおよぶぐりのめぐりの下人

および（源とし姫）廿 入日をゐへにをちこそありけれさまことゐもおもひおよび給ふ御こゝろゐ

およびかゝる（つれ〳〵）百廿一段 人のうゝろよさふらふいさを惡くもおよびゐゝらぜ

およびさるこゝち（源わゐゐ）下卅四 御けうそくい例のゐどなればおよびたる心ちゝ

てことさらよちひさくつくらもやとそゆるぞいと哀れゆよおもゝける

およびなゝ（源紅葉賀）廿二 御こゝのうちもおもひやられていとゞ及びなきこゝちゝ給ふ（同わゐゝ）廿八 かくおよびおきあゝろを思へるおやたち（同よもきふ）十三 およびなくみたてまつりゝ御ありさまのいとゐあゝくおゝろぐるゝきを

○およびて（枕）七 碁をやんでとおき人のうつとて云々おとりさる人のゐぜまひもゐゝこまりさるけゝきよ碁をんよりいそこゝとほくておよびつゝ袖のゝたいまかた手にて云々をゐゝ（遍昭集）廿 さうゝ〳〵ゝうもべりゝゐ馬よのりて物にまゐりゝ道に女郎花のみえゝをおよびて折ゝほどよ（源紅葉賀）廿三 引もおちていで給ふをせめておよびて（狹）下ノ十四 少ゝおよびてまゐらせ給ふ（枕）二ノ廿七 枕ゐをなる扇を我もちたるゝて及びてかきよにるがあまりちゐうよりくるよやと心ときめきせられて（同やとり木）廿六 やをらおよびて 補（玉葉）雜一國道 「川おをい岸におよびて五月雨のをゐさよ舟のさをぞをゐゐ

○およをせ（榮楚王夢）卅三 御たけいくらをゐりとの給へば四尺の御几帳よ今をこゝおよをせ給ものとぞをえさせ給ふ

○およをぜ（榮晚待星）六 御くゝのかゝりおどろよくくとも筆もおよぶまゝ

○ およぎ（源ゑ〜姫）廿一 およぎとも これも月まもなるゝものゝいなど 補（新續古）雜中雅世「ゝけてさまおよぎながら代々にのあとまゝへるもうれしわゝのうら涙

および 漢文の及（奥儀抄序）奈良の御時の万葉集をもゝめて拾遺および金葉集にいたるまで（榮みとてぬ夢）卅四 五月十一日まぞ左大將天下及ひ百官施行といふ宣旨くだりて（續紀）九十八 百官官人及京下僧尼大御手物取賜治賜久止詔

および 指（土佐日記）下 けふいくゝもつゝそとかぞふれゝおよびもそおあれぬべし（源帚木）十四 女もえそさめぬ筋にておよびひとつをひきよせてくひてむべりしと（和名）三七 指 由比俗於與比（枕）四二 沓の音の夜一よきこゆるゞとまりてたゞおよびひとつしてたゝくゞその人あゝありとふとしるおそをゝしけれ（源空蟬）四 そみのところゝ〜云々 およびとゝゞめて 補（榮日蔭のこのつら）九 およびをさしいひつれといとけざやゝゝあえもいもぬ（拾玉）四 「山のおくまおよびそゝりてゝぞふれゝあれより春もめぐりきまけり（宇治拾）十一 十七 およびをさしてとむきゝうむき物いふ男さてり（枕）八 二 兒ノ いとをゝしげなるおよびまとらへて

およぎけ（源うき舟）五 わゝ君のいとうつくしうおよぎけ給ふまゝまゝ（同桐つぼ）六 此御子のおよぎけもておむする御かたちこゝろをへありゝたく（同うき舟）十一 猶ほ

ふい出おむしまして御志とべらゞのどゝまゝと聞めおよぎけてもいふ哉とおおし て（同帚木）卅七 世あそさざめおき物おれおどいとおよぎけの給ふ（空穗藏開）上 四 十四 いとゑんおる 文哉中納言あしつゞよりあり父おとゞいとゞゞれとんとの給ひていゝまおよぎけて宣ひたるやおどの給ふゞどま（同樓の上）下 四 十四 一宮のわゝ君の今いおよぎけてきんひゝまゞしうし給ふまをしへさせたべちん（源紅葉賀）十五 ゞどよりいゝ大きまおよぎけ給ひてやう〜おきゝへりおどし給ふ（落くぼ）二 曰つきあいきやうづきて少しまはひたるけつきたりきよゞおりけりさゞ眉のほどまぞおよぎけあしけさも少し出るさりと見る（源をとめ）七 左衛門督の子ともおどをそれより下臈とおもひおとしたりしたま皆おの〜加階しのゞりつゝおよぎけあへるにあきぎをいとかゝらしと思れさるゞ（同ゑしい木）卅七 大將もとゝにえためらひ給ももあやしういとこよなくおよぎけ給へりし 補 桐壺ノ注ニ万葉ニ助及ト書ガトナヒタルコ也トアルヲ契云万葉ニ助及ノ言ナシ不可用ト云々詞ノ義詳ナラ子ドオトナシキサマ也○縣居翁云万五ニ意余斯遠波とあるハ老そゞ也是まよるまおよづけてい老付てふ意にて俗まとしよりめきてといふまゝ同ゞもゝき木の卷に光源氏のおよぎけてのたまふと書たる是ありさてそれそ轉ゞてい乳兒のやう〜ひとゝおりゆくを

どの事にも其頃ハいひしあるべしとかけりアケマキにそちの國紙においつき書給
てと有同語也オイのイハよまかよひつくのつハもよまかよふ常の事也（万）十九「おも
かげにもとなミえつゝかたてひハ意伊豆久安我未けさしあへむかも（源桐つほ）十九
いとゞこの世のものならずきよらにおよずけ給へれバ（著聞）十八、四道良ハおよずけ
ものなり（源をとめ）卅九きびもにきよらなるものからまだされにおよずけて
[おだしく]（源帚木）廿五かうのどけきにおだしくてひさしくまかざりしころ（同う
す雲）卅一おだしう思ひなりにてもべり（落くほ）三家といふものハ券もさる人より外
にしる人なきときゝしかバおだしう思ひてわが家ともなのらでありつるハ（平家
物）三ノ廿八入道相國のさしも横紙をやぶられしにも此人のおもしてやう〳〵になだめ
の給ひつれバこそ世ハけふまでもおだしかりつれ（源紅葉賀）六おだしくかる〳〵
しからぬ御こゝろのほども（續後紀）一五太能毛之久於太比之久在（源とつ音）十二あた
れになげき御心のほどをおざしきものにうちとけたのミ聞え給へる御有さま
補[おさひに]於多比仁（詔詞解）四、四十二（後紀）延暦廿三年十月詔云々御意毛於太比爾之豆
（同）癸丑詔云々御意毛於多比爾云々
[おれ]（古事記傳）十五、十八人ヲイヤシメテよぶ言葉也（宇治拾）五、三やうれおれらよめされ

て參るぞといひければ（同）三十、出納いふやうおれハ何事いふぞとねりたつるおれぞ
かりのおほやけ人ぞわが打たらんは何事のあるべきぞ云々舍人おそきにもら立て
おれハなまでといふぞ（神代紀）七爾自居之注云亦此云飫例（古事記）中卅六意禮（枕）十ノ十一ほ
とゝぎすよおれよかやつよおれなきてぞされハ田にたつとうさふに補（大かゞミ）
三おれハミづのをの御門のおもしまたとしの正月のもちの日に生れて（宇治拾）十一
十四おれハさてハまかりなんやとて走かゝりて（著聞）十六、卅七但おれか母にて候ものあ
ねよりもよく候
[おれたる]（源をとめ）廿一かしまがり給へど人の親よおのづからおれたる事いでくべ
かめれ
[おれ〳〵しく]（源みゆき）九あやしくおれ〳〵しき本性にそふものうさになんもべ
るべき（同とつ音）十三もとよりおれ〳〵しくたゆき心のおあさりに（同手習）十七もと
よりおれ〳〵しき人のこゝろにてえさかしくあひてもの給ハぞ
[おれまとひ]（源夕きり）廿九かく翁のなにがしまもりけんやうにおれまどひたればい
とぞ口をしき
[おれおたれ〳〵]（盛衰）二十六うれしや水なるハ瀧の水とうたひておれこたれ〳〵と

一時斗ぞまとふたりけり（宇治拾）ゑみこたれともあり

おれみ（源夕きり）六更まりぞりそく〳〵うおれて年ふる人ハさぐひあらドゥ

ーとのたまふ補凝（カロカ）にてといふこと也おれ〳〵ーおどもいへり

おれもの（蜻蛉日記）二ゑれゲ獨のおれものまて（源ゑ合）廿深きらうおく見ゆるお

れ物もさるべきにてかきうつ書碁たぐひもいでくれど

おそ（万）二「たもれそとゑれいきけるを宿りさぎゑれをりへせりおそのさもれを

（同）九浦島子歌「とこよべに住べきものをつるぎさちおゲこゝろりらおそやまの君○

おそい愚かりとそーれる意まや

おそろー（源桐つぼ）廿四母君あおおそろーや云々きりつゲの更衣のあらもまもてな

されーためーもゆゝーうとおゲーつゝゑて（同同）廿さとうりーまくおもそれゲあ

まりまおそろーきまで御覽ゑ（同夕うのぼ）廿六右近をおまー給ふまれもおそろーと思

ひゑるさままてまゐりよれり（同わうの紫）廿九わり君いいとおそろーういりならんと

わかゝりれていとゞーき御心まどひもいとおそろーきまでえ給ふ補（千載）誹諧

空人法師「おそろーやきそのかけぢの丸木ぞーふえ見るゑびまおちぬべきりな（源み

をつくー）廿一のぞき給ふゑーきあれゲいとおそろーけまゑ侍やえたりこゝちのいとか

くりぎりかるをりーも

おそもる（源帚木）廿九ともかくも思ひわりれぞ物まおそもるゝ心ちーてやとおびゆ

れゲ（同夕うのぼ）廿六ものまおそもるゝまゝちーておどろき給へれゲ（同同）廿ものま

おそれゑる心のなやまーげかるを云々（同末つむ）廿三空のけーきもけーう風吹ふ

れておそとあぶら消まれるそともーつくる人もおーりの物まおそもれー折おゲー

出られて補（宇治拾）白河院御とのでもりて後物におそれさせ給ひける（濱松）三、下

夢まさへえ給へるまおそもれつゝ（同）四、下いえドうおやえゑづらひ給ふとのみ見

えつゝおそもれ〳〵ーてつねよりもおもりゲにえ給ひつゝ

おそり（古）序かつい人の耳まおそりかつい歌の心まもぢおもへど○契云おそれ也

土佐日記まこ此わたり海賊おそりありといへゲ神佛をいのる（後拾）神祇いつき「さの宮御歌

りづきまさやけき影のえぬれゲちりのおそりいあらドとぞおもふ補（宇治拾）事

のおそりさらまさふらいドといひて（同）あやまれあんとおそりおゲーて

補おそれ〳〵（著聞）十七、十九大納言あれい何ものぞと問ねきゲおそれ〳〵申ねるい

おそあいる（空穗とー蔭）上おそあもるほどさま

おぞく（空穗國もつり）上ノ廿八かの事いおどーそらでとまあらド内の后いとおぞく心

らーこくおいー給ふ云々（盛衰）三十五　内田三郎家吉と名のりて進ミけり巴ハ一陣に
すゝむよハ剛者大將軍にあらぎとも物具毛のおもーろきよ押置ひておやくびねぢ
切て軍陣よ祭らむとおもひはるこそおぞうありけれ

おそくつ（著聞）十一、十一　ふるき上手どものかきて候おそくつのあかおとを御覽も候へそ
の物の寸法ハ分にすぎて大よ書て候事いらでら實よさハ候べき　補　枕繪也、春畫也

おぞまーく（源帚木）十八　かくおぞまーくハいとゞき契ふらくとも（同夕きり）人さゝ
もゝておぞまーらるべきゝざを（增かゝみ）いづくよも守護といふものへ日代より
ハおぞまーきをゝるたれば

○おぞまー　の所可考

おそふ（土佐日記）ふねハおそふうゝのうちのそら　補　（漁隱叢話前集）十九、十　棹穿波底、
月船壓水中天

おそくらへる（宇治拾）十二、廿二　此兒のあそびよいでゝるぬるがおそくらへりれば
やーとおもひていでゝそれば

おぞき（源うき舟）六十四　こめきおそどらよさをゝ〳〵とゝゆれどけたらう世のありさ
まをもーるらたそくおくておそーたてさる人よーあればそこーおぞらるべきこと
をおもひよるなりけんらー（同東や）卅八　めのとのたいとくるーと思ひて物づゝゝ
せぎはやりらよおぞき人ゐて

おそき　遲　いさりらへるやおそき（枕）九、二　いさりらへるやおそき　もてくるやおそき
（枕）十二、十六　もてくるやおそき　さつやおそき（拾）夏、盛明のみこ　「たちちるといとひーものを
夏衣たつやおそきと風をまつらかな　補　（後拾）春上、和泉式部　「春霞さつやおそきとやま川の
いとまをくゞる音聞めなり　とるやおそき（枕）七ノ十九　かんもりづらさのものどもさゝ
ゝとるやおそきと

おそきとー（空穗　嵯峨院）九十三　かくてとーいとおそき年にて三月らゝの十日ぎりり
花さらりあり

おそきうま（躬恒集）卅二　「おそき馬ハあーふちからであふれどもこゝろのみあそさ
きよさちけれ（和名）十一、五　駑馬　於曾岐宇萬

おそー　遲（源東や）廿九　例もかゝる時よハおそくもわたり給へハ（同帚木）廿八　頭の君ま
めやらにおそーとせめ給ふ（天德歌合）かゝるそどよ左いとおそくまゐるとて主殿
頭平これつねをめーておそーとめさせ給ふ　補　（狹）三、下　日のいたうくるゝハ心もとな
きそおそー〳〵とのゝーり給へハ

おそひ（榮衣の珠）卅四 御屏風共まいきおるからあやそとらせ給へりおさおさ〜してさるべき心ぞへあることゞもを大納言さま〜まかき給へりへりにいららの錦のぢあときをせさせ給へりおそひまいみおまきゐ〜さり裏まいかうぞめのかたもんのおりものおり

○車のおそひ（枕）八、七 いやーげおるものむーろぞりのくるまのおそひ

おつ 墮落（こゝろ）の（古）秋上 遍昭「名まめでゝをれるぞりぞ女郎花これおちまきと人まかたるか（千載）こい心ある文を女のーゞ〜つゝいーれれゞ 空大法師「おそろーや木曾のかけぢの丸木ぞーふこ見るたびまおちぬべきゝか

おつ 精進をや（土佐日記）舟ぎこせちこをさうどものおれれゞうまの時より後まかむる也 ぢとりのきのふつりたりー鯛ませまおれゞよねをとりゝれておちられぬ

おつ 落（源よもきふ）八 やんでとあきをぢなくゝもうまでおつべきをくせの有れれぞまや（同帚木）廿四 をらゞ落ぬべ死萩のつゆ（安康紀）十四 あゆひの古輪孺於智珥岐等（源きりつほ）九 車よりおちぬべうまどひ給へり（同夕ゝのほ）廿六 けさゝ谷まもおち入ぬべくおんこ給へるに（同あゝのー）四 神のなりひらめくさまさらまいもんかこあくおちかゝりぬとおゞめるま（頼政集）上ノ廿四 「落ゝる山のもちゝき月ゝ々ゝいつま

で思ふ我身おりけり 補（玉葉）雑一 清輔「おきたへの枕におつる月見れゞあれたるやどもうれーゝりけり（新古）冬 清輔「冬枯れゝりのくちもの霜れ上まおちこる月の影れさやれさ

おづ〜（かけろふ日記）一、文詞 いゝかるるとりまゝあらんふこぞあるまゐりまはーれれどつゝまーうておんたーゝまとあらゞおづ〜〜もとあり（右京大夫集）二來 こくーれぞのゝ御うーろよりおづ〜〜ちとこまゐらせーゝゞ（空穗あてみや）廿三 人の國境迄もおひつゝいされ流罪のつこともおらゞいゝゞせんとておづ〜〜申

補 おなど（万）十二、廿八 「むらさきを草とこく〜ふれ鹿の野ゝまとまーてまゝろゝ同（オナジ）

おなどいへ 同家 （千載）戀四 おなど家まの十首の戀の歌よみ侍りけるとき云々

おなどもちそのざ 同ノ座 （源みのり）三 後の世にゝおなどもちその座をわけんとちぎりゝもー聞え給ひて

おなどをど（源桐つほ）初 おなどをどそれより下らうの更衣たちゝ云々（同浮舟）卅五 かの君もおなどほどまていこ二つ三つまさるけぢめまやそこーねびまされるけーきようゐあとぞ

おなどとー 俗コオナイドシ也 （千載）雑中 法成寺入道前太政大臣道長公歌云々 公任ゝへー「お

おゝ年契りーあれゞ君ゞきる法の衣をさちおくれめや左注おなゞとーの人まおん侍りける（源をとめ）四十きんちらいおゝとーあれど（同夢のうき橋）七おゝー年のほどゝゝゆる人の

おゝとー　同年（千載）哀同ー年の冬云々

おゝどりゐ　同シ顔笑ヒカヽル（狭）二、上廿六。兒ノ只大將の御同ー顔まてせちまに笑ひかゝらせ給ふにも云々

補　おゝどりざー（源常夏）四朝臣やさやうのおち葉をゞまひろへ人ところき名の後の世まのこらんよりいおゝとーのざーにてなゞさめんまおでふことりあらん

おゝどつゞき（枕）十、七うれしき物、人のやりすてまる文を見るに同ゞつゞきあまゝ見つゞたる

おゝどゐみ（枕）二、廿。扇の事を骨いりられゞたゞ赤き紙をおゝどゐみまに打つりひもち給へるい

おゝどうてゐ。花ノ中ノ（源すゝむー）四よー後の世にたまかの花の中のやどりまへだてゐくおもはせとて云々「蓮葉をおゝどうてゐと契りおきて露のわりるゝけふぞりゐーき

おゝどくい（源東や）五かの少將契りーゐどを待つけて同ゞくいとくとせめけれゞ（同）十五外ざまへ思ひゐり給ひぬべりゐれゞ同ゞくいと思ひて（枕）四、三雪いと高うふりまるを女房どもゐどーて物のふまいれつゝいとおゐくおくを同ゞくい庭ままおとの山を作らせ侍らんとてまふらひ召て（元真集）十四「虫のねの數ぞまさらん同ゞくい君ゞまゞきの露まゞにゐけ（六帖）六、上「をるりらまに我名いまちぬ女郎花いざ同ゞくい花ゐゞらまん（拾）春、よみ人しらす「櫻ゞり雨いふりきぬおゝどくいぬるとも花のりゞまかくれん（兼盛集）十二「おゝどくいつゞてをこひん難波女のーのびにのまいもえてまさらゞ

おなゞくや　モロトモニノ心（兼盛集）廿一「おゝどくや人の心もいのるらんわゞおもふ事をあやまつゐ神

おゝどやう（源うき舟）四心よせつりうまつり給ふ事同ゞやうゐり（同夕のほ）五十二そひたりー女のさまもおゝどやうまてまえれゞ

おなゞこと（源東や）十まことまに同ゞおとまに思ふべき人ゐれど

おゝどこと（源まき柱）廿、九云々とのみおゝど事をせめ聞え給へど御返りゐー（同東や）十五おのれいおゝどこと思ひあつりふとも（遍昭）十六（新古）雜下「さゝゞまの空まに

をゞくもおゝゝとまざき宿よもいくよゝふる（源さゝ姫）廿九たれも思へゞ同ゞことあるよの常あさあり（新古）雑下蟬丸「世中ハとてもゝくてもおなゞゝと宮もこらやもたてゝあけれゞ補（源若菜）下百三おゝゝことふゝき所侍らん（枕）四ノ卅一今ハゝく

いひあらたゝつれゞおゝゝことゝちたり。カチタルモ同ジコトヽ也（源夕顔）三玉のうてあも

おゝゝことゝなり（同さのき）四常よおゝゝことのやうあれども（同若菜）上ノ十五あきお

やのおもてそふせゝゞそもづゝゝむさぐひおほく聞ゆるいひもてゆけゞそおおゝ

ゞことゝなり（源まつ風）六よるひるおもひそれておゝゝ事をのみ（拾）賀順「老ぬれゞ

おゝゝことこそせられれ君ハちよませきこハちよませ

おゝゝこゝろ（拾）戀三源さねあきら「戀ゝさハ同ゞ心よあらぎともあよひの月を君こざら

めや（源末つむ）十同ゞ心よいらへ給むんハ願ひゝおふ心ちおんもべき（貫之集）下

廿一「花さよも同ゞ心よさく物そうゑさる人の心ゝらおん（源玉葛）九同ゝ心よいき

そひそゝもそべきことおどゝたらふよ（御堂關白集）「そぎのそよ風の吹よる夕ぐ

れをおゝゝ心におゞめまゝやハ（古）秋下寛平御時古き哥奉れと仰られれゞ立田川

紅葉流るといふ歌をかきてその同ゞ心をよめりける興風の歌云々（後）戀一、よみ人ゝらす「つ

らゝらゞ同ゞこゝろよつらゝらんつれなき人をあひんともせぎ（同）戀二忠峯「ひとり

のこ思ふハくるゝいゝよゝておゝゝ心よ人をゝゝへん（古）戀一、よみ人ゝらす「よそよゝて

こふれゞくるゝいれひもの同ゞ心よいざむそびてん

おなゞえた同シ枝（古）秋下、このちおん「おゝゝ枝をわきてこのもとのうつろふハ西こそ秋のは

ゞめありれれ（和泉式部集）上「おなゞえにおきつゝをりゝそとゝぎを聲ハゝもら

ぬものとゝらおん

おなゞさま（源桐つぼ）廿三そくえうのかゝこき道の人よゝんゞへさせ給ふにもおゝ

ゞさまよ申せゞ

おゝゝき（拾）雑賀貫之（貫之集）「松の根よ出る泉の水おれゞおゝゝき物をたえゞとぞ

おもふ補（和泉式部集）「山といへゞうき身をむきよあゝゝりどもおなゞきあめのゝ

たよぞありける（狭）四上、おなゞき岩のさゝぎまひも

おゝゝひと（源わゝの紫）三十四いもけなき云々舟ぞえおらぬおゝゝ人よやとことさら

をさおくゝきなゝ給へるも（古）戀四、よみ人しらす「堀江こぐさなゝゝ小舟こぎゝへりおゝ

ゞ人よやこひこたらおん

おゝゝをぢ（源手習）五十おゝゝ筋の事をとゝくかきをさびる給へるよ

補おらぶ（万）九、卅六あめあふき叫於良妣（古事記傳）二十五、五十九

おむ　恩（源帚木）廿九　こゝをれぶそつくるあとなどおらひ侍りしゝばいまはそのおんいわをれ侍らねど（空穂俊のけ）中。侍女詞　よゝいゝゞいせんおうを知り侍らば物なおもゝそ野山をわけてもおんをゞつゝうまつらん（長門本平家）十四　心い恩のためはつゝへ命い義はよつてゝろゝれば云々あやゝの鳥けだ物はも恩を報ゝ德をむくふ心ざゝ候とこそ申候へ

おむ　御（源紅葉賀）二　これや佛の御ゝれうびんゝの聲ならんと聞ゆ（同蜻蛉）四十五　此大將殿のなくなゝ給ひてゝ人い宮の御二條の北方の御おとうとおり○おれらの御ノ字のゝきどあろ今とゝもれり心えおくべゝ（著聞）七ノ十三　後鳥羽院御熊野詣ありけるは（同）三ノ十二　後白河院御熊野詣に（隆信集）後白河院御くまのまうでのるその間（玉勝間）四ノ十三　説あり

補　おむとき　御時（源藤のうらと）八　御ときよくさうどきて藤のうら葉のとうちぎんゝ給へる（空穂さゝの院）下　御ときよきほどゝて御あそびさゝりて（同國もつり）上ノ六十五　彈正宮の御ときよくゐひ給ひてまゐれり（同くら開）上ノ一十一　あるゞのおとゞ御ときよくうちわらひ給へば（同）二ノ五十五　御ときよく御らんゞて御文ぞゝり（同）中ノ十　うへいとゝさゝらん文さいはいおはゝとて御ときよくわらいせ給ふ

おむゝた　御方（源わふひ）五十一　たち出て御のたまいり給へれば注おとゞ大宮あどの前より出て葵の上のおもゝさるゝたへ入給へる也（源玉のつゝら）十五　夕カホチ御方サシテいもやうゝせ給ひき（同）廿四　御方ゝも受領のめまて品定りておもゝまさんは（同東や）北方云々御方をもゝらあらいせとりつくろひ（同松風）八、御方「いきて又あひみんおとをいつとてゝかぎりもゝらぬ世をゞたのまん（同同）十、御方「いくゝへりぬきゝふあきをぞゝつゝうきゝはのりてわれゝへるらん（落くぼ）一、上きんたちとものいもぞ御方といまゝていもせ給ふべくもあらぞ云々おちくゞの君といへとのさまへゞ

おむゝた　御方。居宅（源をとめ）十五　くさのさの君ひとつまておひ出給ひゝどおのおの十はあまり給ひて後い御方ととはて所イ

補　おむゝゝ（竟宴歌）いさをゝのたゞしき道のおむゝゝさ（字鏡）偉慶慢也奇也賀也幸也福也於毛我志又宇禮志

補　おんそ　御衣（宇治拾）十三　いそどきさゝらのおんぞのゝたのいそぎさまいらん物といあおおそろゝやといひて

おんな　嫗（落くぼ）一、六　老婆（ナンヤ）（神代紀）上ノ廿五（枕）十、三　さゝゝき物、兒のいのりもらへあぞ

そる女とも今はおんなをなんめを御德を見る事おどかたるもそろ（りをるもイ）

補 おんなおきな（榮音樂）二ハふざにとておいたるわらきまゐりつぞふ七八十のおんなおきなつゐをりをたのもしきものにて出さちたるさま（同峯の月）また世のありそむらし見さるおんなおきなまさらゝるまうある事見すおどぞなく〳〵申おもへる○れきおおむなといふことも多しおきなの所は出（空穗くらひらき）上一二、かたむらのゐどよりとし九十ばりはてゆきをいたゞきたるやうあるおむなおきあむひにむひきて云々（同）三百さいはなり侍るまでこのおむなおきなのみたてまつりむべるに

補 おむやう（榮殿上の花見）廿八此二所の御やうはいえおむしまさぎ云々（同月の宴）わゝ君の御やうなるきみはいまいあひたてまつりなんや

おむやうし 陰陽師（枕）二六心ゆくものゝ物よくいふ陰陽師して河原は出てそのむらへしたる（源すま）四八十此國はかよひける陰陽師めしてむらへさせ給ふ（呪咀）

おむあと 御事（新後撰）雜下後嵯峨院御事の後云々法皇御製「大井川ゆく瀬の波もおなゞくいむらしはらへれ君ゞかげとん（玉葉）雜四同し院の御事ゐ世をそむきてよめる 從三位藤原豐子

おむこと 御事。人ノナセシヲチサ（とりゝへむや）三廿七内侍大將わゝ君かゝる事ゐの給ひそ殿上のおむせん限りい我も世をなん思ひ限るまゞき句御事はより殿いむげにふかくはなり給へりしそ（源をとめ）廿六。大宮夕ギリニ向テ御事はより内のおとゞのゐんゞて物し給ひはしらば（同あけまき）廿一御事をのゝそあさらしう心くるしうかゐしき物は思ひ聞ゆるを（同）四十二あけくれのゐゞめはもさゞ御事をのゝなん心ぐるしう思ひ聞ゆるは

おむあい 恩愛（方丈記）人をもてくめば心恩愛はつゝもる（とりゝへむや）三十九（同）二十七

おむみゞめ（枕）五十二。センシクリヤウト秀句ヲ清ノイヒシトキ信經詞 あれいおまへにかしこうおゞせらるゝはいあらぎ信つねゞ足がさの事を申さゞらましらばえの給いざらましとてへにゞゝいひしこそをゝしのりしらあまりある御身ゞめりゐとかさいらいたく

おんゝき（空穗俊のけ）上百味そそゐへたる飲食はなりぬ

おうより（枕）九三十人の前はゐたるはあなくらおうより給へといひたるはそ又さびしれれさしのぞきたるを見付ていい驚きいれたるも（同）九一宮は初て參りさる頃物の耻ゝしき事數しらぎ中略御ふとりつぎ立ゐふるまふさまおどつゝましれならぎも

のいひえ笑ふいつの世にゝさやうまおらひおらんと思ふさへぞつゝまーきおう
よりて三四人つどひて繪おど見るもあり

おうより（蜻蛉日記）三ことゝいまめゝーうもあらぬ内によもひおどもおうよりゝ
たべけれゞ女ゝさらんとも思ゝぞやありれん（同梅のえ）十二さへゝをゝーきことゝ
とよりてこそかき出る人々ありけれど。コレハオウ（空穂さこの院）下七十九こゝゝより
ーこゝゝひたぶるのさうぞくーさる物どもうちむれつゝおうよるべくもあらねゞか
くれぬ（源玉かつら）四十六　御手の筋おとゝおうよりにさり〇（花鳥）奥也昔ニヨリタル
心也（榮殿上の花見）十四　御車のーりゝゝせんト三位ぞさふらひける宣旨ゝ源大納言
の御女三位ゝ内の御めのとの大貳のおりおうよりての名ゝかうことの外にてぞあ
りける（同わゝの水）十八　故朱雀院の御娘のれいぜい院ゝ參らせ給ひーこそゝかゝゝるた
ぐひなめれそれゝいたうおうよりさるうちゝ帝も例ゝおゝーまさぞおどありーゝ
ゞいと思ふさまゝもみえゝぞありー（補）湖月本あふよりとのれるゝ非おり

おうな　嫗（源手習）卅四。大尼君おうおゝ昔ゝあづまでとおそゝことともなくひき侍り
ーゝど（同藤のうま）十五。ヒタクロノ北ノ方ノコヲ　年のそとそつよつゝおのかそゝおとなるこの
さたゝもあらぬを云おうおとつけて心ゝもいれぞいゝでそむきおんと思へり（古

事記）上廿一　老夫與老女二人在

おうおく　奥ナキ也（源東や）十五　あやーくおうおく人の思たん所もーらぬ人ゝていひちら
ーたり（同同）五十七　おうおくあゝ〜ーゝらぬ御心ざまなれゞ（同まき柱）四十一　おう
おき事やの給ひ出んとつきかたにに（とりゝへそや）またいとわゝくおうおくおた
ーまそを（源うき舟）五　ちひさきわらゝそどりのうそやうおるつゝそ文の大きやゝ
おるゝちひさきひゞこを小松につれたる又そく〜ーきさて文とりそへておうお
くたーり參る（同）廿五　兼てゝうおたーまそべーと承らまーゝもいどこのたおれおけれ
ゞゝそゝり聞えさせてまー物をおうおき御ありきゝこそゝとあつゝひ聞ゆ（同手
習）四　此火ともーさる大とこたゞゝりもなくおうなきさまゝてちゝくよりて〇注、
奥ナキ也思慮モナキ也（同）四十八　少將の尼ゝつゞさりれゞまどひきて云々あおあ
さまーやおどかうおうおきあとゝせさせ給ふ（紫式部日記）下　えんなることゞもを
つくさん中ゝ何のおうなきいひそぐーをゝゝーゝ侍らんゝういとうもれ木そをりい
れたる心そせゝてかの院おまおらひ侍らゞそおゝてーらぬ男ゝいでおひ物いふと
も人のおうおき名をいひおそにべきならぞなと（狹）一下十三　書ぬーたる人々のささぐ
ゝ驚きておうおくおきあげりさるに云々心おのさまやとそえおげら云々ユクリナ

クノコトロモアルヘシ

○おうおうらぬ（源うき舟）卅六。右近必 同ドやうまむつまーく覺いさる若き人の心さまもおうあうらぬをかたらひていそおくわりおき事同ー心まてうくー給へといひてけり

おうおげ（源みもき）廿七 きはばうれもおとりむらありとおうおゆまの給へば云々さてもさがいひーことをきゝてかくゆくりなくうち出給ふぞ

補 おう〳〵（宇治拾）四 往生をべき相あるものゝあーきられていうでう見んやおう〳〵とおめきければ（同）九十六 人の妻まくものありやう〳〵おう〳〵といひて

おの。オノレ或ハ、他チサシテ（竹取）下。天使詞 かくや姫ハ罪をつくり給へりければかくいやーきおのげもとまをたーおむーつるなり

おの（拾）雜戀人丸 （万）七作者不詳「みーま江の玉江のあーをゑめーよりおのげとぞおもふいまざからねど（伊勢物）九十四段 おのげ聞ゆる事をば今までをて給むねばことゐりと思へど云々

おのげぞち（源あふひ）四十二 おのげぞちあむれあることゞもうちのたらひて（落くを）四 今の時の御ぞうとておーさちてあらんうーなどおのげとちいひあへり（源

夕きり）十八、云々 おどむつまーうさふらふりぎりハおのげども思ひまざる（同葵）六 わうき人々詞 いでやおのげども引ーのびて見侍らんこそもえなうるべれ

おのげよゝ よゝの部よも出す（後）戀三長谷雄「ーをのまにあさりをるあまもおのげよゝうひありとこそ思ふべらおれ（同）戀五、よみ人ーらすのげよゝまハおらをもあらおん（伊勢物）廿段 一おのげ世々まなりまれればうとくおりまけり ○玄旨云離別ーておのれ〳〵げ世まおるをいふ（蜻蛉日記）中、長歌上 まーてこひぢまおりさてるあまさのさこハおのげよゝいうをうりうハそぞちれん

おのげうら〳〵（拾）雜上人丸「白おみハたてど衣まかさおらをあうーもをまもおのげうら〳〵（榮うちく の別）十六「かさ〳〵まの別るゝ身まも似さるうかあうーもをまもおのげうら〳〵

おのげさつきのとり（夫）八（千五百番歌合）後京極「時ーもあれ花ちるさとの軒の雨におのげさつきの鳥の一聲

おのげさま〳〵（詞花）賀 ある人の子三人まうふりせさせたりける1云、元輔々「松ーまのいそまむれるるあーさづのおのげさま〳〵ちえーちよ哉（伊勢物）八十六段「今までまわをれぬ人ハ世まもあらトおのげさま〳〵年のへぬれば

おのゞとゝ（源よもきふ）十六 おのゞ身〳〵につけたる便りども思ひ出てとまるまゝ
う思へるを

補 おのゞきぬ〳〵（古）戀三、よみ人しらす「おのゝめのゆゞら〳〵と明行けばおのゞきぬき
ぬぬるぞ悲しき

おのゞゝ（貫之集）廿六「おく霜の心やわくる菊のもなうつろふ色のおのゞおゝな
る（六帖）四「戀ゝをなさまゝ〳〵ありと聞かへるおのゝおゝとぞねゝなられる（拾物名、四十九日木）四 おのゝゝうらめしきをり〳〵（同あふひ）四十二 おのゝゝあもれあることどもおほゝり（万）十二、十「各寺師ひとしかすらし妹にこひ日にけにやせぬ人にしらえぞ（源帚木）五 わゞ心えさること計をおのゞゝ心をやりて人をばおとしめあど
（陽成院歌合）「ちらにある心のまゝにおのゞゝわゝるゝ秋をゝしこつる哉（源
夕のは）十八 いと哀なるおのゞゝのいとかなしく起出てそゝめきさゞく（蜻蛉日記）一
その日をぎぬれば皆おのゞゝいきあられぬ（同）一 さまゝ〳〵なる人のいきちがふ
おのゝゝゝ思ふ事こそあらめと見ゆ（和泉式部集）廿「おのゞゝふれどもあめ
のしたなれば袖をゝりあそわゝぎぬれけれ 補（万葉略解）おのゞゝ各自の事也

語のもとゝ未考へぞ後々も源氏物語橋姫に池の水鳥どものもねうちゝゝしつゝお
のゞゝさへづる聲云々といへり

おのゞものゝら（古）戀四「今ゝとてゝらへそこのゝひろひ置ておのゞものゝら形ゝ
とや見ん（仁德紀）四 鮮魚亦鰒海人苦於屢還乃棄鮮魚而哭故諺曰有海人耶因已物以
泣其是之緣也

おのれ 人ヲサシテ（空穗國もつり）上ノ廿一 おとおのれゝそゝ男にて人と文ゝよもしやゝ
そる

おのれ（詞花）戀上重之「風をいさみ岩うつ波のおのれのゝくさけてものを思ふあろゝ
ゝ（源東や）十五 おのれゝおゝゝこと思ひあつゝふとも（枕）五 そきそ隆えんまたうべ
おのをゞもとゝめでたき云々

おのれら（狹）四、上廿一 さるものゝらおのれらをもおゞしうとみ云々

おのれひとり（源夕のは）三 しろきもおぞおのれひとりゝゝゝのまゆひらけたる（同
わのゝゝ）下、七十七 はちその花の咲わされるゝ云々かれみ給へおのれひとりもすゞしゞな
るゝゝとのたまふゝ

おのづゝら（源紅葉賀）九 ことぞとももべらぬほどゝおのづゝらおこたりもべるを

（枕）四一、さゐんとまねび啓ーてわざとせうそゐーて呼出べき事にもあらぢおのづからおづからは局などにあらんまも（源桐つぼ）四あなげちまおまへさらぢもてなさせ給ひーそとまおのづからかろき方まも見えーを（同）十七ゥくてもおのづら若宮などおひ出給もゞさるべきついでもありゐん補（新古）冬西行「おのづらいもぬをーさふ人やあるとやそらふそどまも年のくれぬる（尾張家つと）正明云おのづらい俗まもーひよつとゝいふ此歌まていもーひよつとゝひ來うといもぬにとひ來る人ゲあらうゥとゝいふこゝろゐり（草庵集）「おのづらちるいづれの梢ともーられぬやどの花ざりゥゐ（玉箒）云おのづらいまれまさゝ〳〵ある事を俗語まて天然（テンネン）と共自然（シゼン）と共いふ其意なり云々今い花の盛ゐれバうちまりせて散（ル）といふ程の事まいあらでさま〳〵天然といい一ひら二ひらづゝちる事のあるをいふ也（草庵集）「おのづゥら又身そゥくに人まだまそむとーられぬ山のおくゥな（玉箒）云此おのづゥらい春部花の歌おのづらちるいづれの云々の下まもいへる如く稀にさま〳〵ある事を俗に天然と共ーぜんと共いふ其心也山中まゥくれそむ人いいと少（スクナ）き物ゐるゲーぜんとまれにも我より外まも又さやうの人の有ても其人まさへーられぬゐり（新古）戀二、般富門院大輔「あそーらぬ命をそおもふおのづらあらバあふよをまつまつけても（美濃家つと）云々あらバおのづらといふ意まてあらバゝ命のあらバ也（尾張家つと）云々命さへあるゐらバ長い年月の中まハもーヒョッと逢れるゥもーれぬ故（新古）戀四、太上天皇「里いあれぬ尾上の宮のおのづら待こーよひもむゥーゐりけり（美濃家苞）此おのづらいたまさゥまきにといふ心ゐり（尾張家つと）さらバおのづらとゝいふべーともゞ大切歟おのづらまちまーとい縁ありーころいよーー來ぬまでもよひのまい自然とまたきーなり一首の意い我さといあを果さる事よゐアもーこよひゐぞい來る事ゥとよひのまい自然と待きー事もありーゲ今いおもひ絶てさやうの事もむゥーまゐりーとゐり（玉葉）雜一、賴清「おのづらたるゝゥと見る程ざまも猶雲のゆる五月雨のそら（新後撰）戀三、從一位祿子「人づてのいつたりまたにおのづらら哀をかくることのもゲゐ

補 おのづま（万）十四、卅五「おのづまをひとのさとまおきおはゝーく見つゝぞきぬる此道のあひた

おのら（空穗 嵯峨院）一、そきとおのらもあるまー一の上まていそゐにおそものーー給へ（同）同三 かくさるべき人をおきていいゥでゥおのらもそゐまも申さバさそゲまも云々（同）同六 さぞゥーー女なるおのらだにこそ筋のたえ候事い思ひぬべーー云々

おの〳〵（源帚木）十七かゝるついでゝおのゝ〳〵むつびともえゝのびとゞめをかんあり（上）八十四わりきどちたのみあらひておのゝ〳〵ゝまたおくちぎりおきてければ（著聞）十二十四おの〳〵物さけて

おのも〳〵（續紀）廿六十一於乃毛於乃毛貞仁能久淨伎心平以天（古事記）上各宇氣比而

補（詔詞解）五四

補おゝ稱唯オヽト（松の落葉）四二くたゝきあり枕册子のおゝ〳〵もおゝの誤からんといへり

おく（源帚木）三おのづからかゝこまりもおかぢ（同）十二こゝろさゝふかゝらん男を置て云々ゝ夕かくれて（古）序赤人ゝ人丸ゞゝもまさゝんあとかたくかん有ける此人々をおきて（万）一ノ廿九「とぶ鳥のあをかの里を置而いなば君ゞあたりハえぞかもあらん（同）五ノ廿九「ひとよゝいふたゝびみえぬ父母をおきてやなゞくあゞわれかん（源夕のは）四十二いふかひなきあとをばおきていとどうをゝと思ひきこゆ（同あふひ）廿九さはゞゞゝ置がさうゝ給ふ物のから（拾）雜下ちひさき瓜を扇ゝおきて（古）雜上忠ふさ「君をおもひおきつのむまゝ鳴たづの尋ねくれたぞありとざゝきく（同）戀二貫之「露からぬ心を花ゝおきそめて風ふくでとに物思ひぞつく（同）戀一元方「たちかへり

哀れとぞおもふよそゝても人ゝこゝろをおきつゝら波（源帚木）七その品々やいかゝいづれをこつの品ゝおきてかわくべき（落くぼ）四とさなき人ぞかりかんそれをびんなかるべくばもなれさるかたゝおき侍りなん（新古）夏忠峯「夏もつるあふぎと秋のゝら露と何れかまづゝおかんとそらん（延喜式）八六月晦祓千座置座爾置足波志底（源桐つぼ）廿ゝさてまつりおくかゝあゝひをかんかへをゝ〳〵（同帚木）卅のらびつゞつものぞをを置さればゝたりかもゝ中そ（土佐日記）たよりあらばやらんとておかれぬめり補（後拾）雜一隆方「よゝさらばまたれぬ身をばおきながら月みぬ君ゞ名こそをゝけれ（拾）雜賀敦忠「千とせふる霜の鶴をばおきながら久ゝきものゝ君ゝぞありける（空穗吹上）下九此節會ゝもき給ふ御ものゝ〳〵質ゝおかん

おく奥（山家）上「東路やあひの中山ほどせばゝこゝろのおくのゝえばこそあらめ（枕）九十一おくゝ碁石けゝいるゝ音のあまた聞えたるいと心ゝくゝ（後）戀六さちよりけるに女ゝげて入ければつかゝゝける「かゞみれぞおくへ入りける君ゝよりおどかゝみゞのとへゝいづらん（源あふひ）七つひゝ御車ぞもたてつゞけされをひとたまひのおくにおゝやられ（同帚木）四十おくかる御まゝゝ入給ひぬ（同わかゝ）三十四例よりも御文こまやかゝにき給ひておくゝ補（万）十四十三「いかほぢのそひのそりゝから

ねもまろにおくをかかねそまさらーよりい

○冬のおく（拾玉）五「一年い冬のおくにも成ふけり都ふるき雪のーら山（千載）冬、和泉式部「外山ふくあらーの風の音きけそまたきに冬の奥ぞーらるゝ

○補 おくり（万）十七八「家ふてもたゆたふいのち波のうへふおもひーをれそおくらーらぎも（同）同「大海のおくりもーらぎぬくされをいつきまさむとゝひー子らいも

おくり 送（源末つむ）八ふりをてさせたまへるつらさわ御送りつりうまつりつるい（古）離別あひーりてもべりれる人のあづまのかたへまりけるをおくるとてよめる（源夢のうき橋）十二むつまーくおぞれ人のことゝーからぬ二三人をりおくりにて（古）離別山崎より神あびのもりまで送りふ人々まりてりへりぞてにーてわりれをーそけるふよめる源さね（同）同藤原のこれをりゞむさーの介にまりける時ふおくりにあふさりをこゆとてよみれる貫之（万）廿五十五堀江こえ遠き里まで送りける云々（源夕ゐは）廿四りついいとあやーくおぞえぬおくりなれぞ（同みのり）十七御送りの女房い（古）哀傷さきのおはきおそいまうちぎそを白川のあたりにおくりける夜よめる補（新古）冬太上天皇「冬夜のかげきそおくる袖ぬれぬ曉げたのよものあらー

ふ（元眞集）「冬のよのなげきをおくるそぞふーも曉げたのつるのひと聲（月詣）十二右大臣「たれもみなへれふー年のすぎ行そおくらぬ人いあらトとぞおもふ（玉葉）春下院御製「飛鳥のおくりのつぞさーぞるらー雲路雨なる春のわかれふ

おくりむりへ 送迎（源やとり木）四十二道のそぞの御送りむりへもおりたちてつりうまつらんに

おくりむりふ（狹）四上卅七おくりむりふる年月のそ過ーつゝ姫君もやうーさりふかり給ふ補（拾）冬兼盛「かぞふれバわゞ身ふつもるとー月をおくりむりふと何いそぐらん（月詣）雜上重長女「年れうちに春いきぬるをなふをまたおくりむりふといそぐるらん（同）十二有家「あとたえて人もとひまぬ山ざとい年をのそまそおくりむりふれ

おくりをさめ（玉葉）雜四ならりらなる人の身まりておくりをさめはる夜

おくりもの。オクリモノト云フハ來レル人ナリシカルニ今スベテ人ノモノトヘヤルチモイヘルハタガヘリ云詞（源桐つぼ）十五をりーき御おくりものなどあるべきをりふもあらねゞ（同わの紫）廿所ふつけたる御おくりものぞもさゝげ奉り給ふ

おくる 劣レル（源帚木）七内々のもておーれたひおくれたらんい更ふもいもぜ（同うつせみ）五そおーぬおくれたり（同末つむ）初つれなう心づよきいさとーべあう情お

くるゝまめやりさあど云々（同帚木）十二そこーおくれさるかさあらんをも（同）十七おくれさるをぢのおゝろをも猶口をーくゝみえゞと（同東や）六十七云々けいにーへそばーらねばひとへまめできまゆるぞおくれたる

おくる（千載）冬西住「駒の跡ゝかつふる雪まうづもれておくるゝ人や道まどふらん（更科日記）上國まさちおくれたる人々まつとてそこまは日をくらーつ

おくる 後ル ナリ（源わの紫）六もーわれまおくれてそのこゝろざー（同）卅五母ゝやを所まおくれ奉りー（大和物）一御供にあれおんおくれ奉らでさふらひける（榮楚王の夢）卅さてもあさまーうおくれ奉りぬるおとゝひたゝちまかーうおぞえーを（土佐日記）「ゆくさきまさつーら波の聲よりもおくれておりんわれやまさらん（源帚木）卅七これゝ故右衛門督の末の子まていとりかーくーたべりーをとさなきゆどまおくれたべりて（同常夏）三おくるゝ雁そーひてたづね給ふらん（詞花）雜下男まおくれてよめる（千載）哀傷女まおくれてなげきたべるおろ

○おくれるて（万）二十五おくれるてこひつゝあらまば（同）九ノ廿六「おくれるてわれやゝこひんいあゝこのゝ秋萩ゝつゝいあむ子故まおくる（源ゐふひ）十一いとあらき人もひたひ髪ゝすこーゝどりくぞあめるをむけまおくれたるゝちのなきや

おくる 起（狭）二下俄まは泣給ふまは人々もおくるゝはとひーて（源帚木）三十八やをらおきてたちきゝ給へば（落くぼ）一驚きまどひておくればさちゝき更まおおさぞ（後拾）春上

小大君 「いらにねておくるあーたはいふことぞきのふをあぞとけふをことーと（源椎の本）廿四まざ朝霧ふりきあーたはいそぎ起て奉りさまふ（万）十九十七「常人も起つゝきくぞほとゝぎは此曉はきあくむつこる（伊勢物）二段おきもせぞねもせで（後）戀一下ノ廿五宮御とのでもりおくるやうまて

おくる 贈（後）春下山櫻を折ておくりたべるとて「君みよとたづねてをれる山櫻ふりまーいろとおもゝざらあん（源桐つぼ）九三位のくらゐおくり給ふよー勅使きてその宣命よむなんりなーき事ありける今一きさゝの位をぞにとておくらせ給ふありけり（拾）雜戀紀郎女まおくりたべりける（伊勢物）六段ともさちこれをゝてよるの物までおくりてよめる

補 おくる（新古）羇旅俊成女「ふるさとも秋ゝゆふべをかさゝまて風のゝおくるをけゝーのはら

おくたゝき（源をとめ）四十七學生十人をめす式部のつゝさの心をの題をあぎらへて御題給ふ大殿の太郎君の心を給ふべき故なめりおくたゝきものどもい物も覺えぎつあゞぬ舟まのりて池またゐれ出ていとをべあゞあり補細流まに臆病ヲ云也

補おくつま（万）十七、長哥云々はしゝやゝあゞおくつま云々（拾）秋よみ人「ゝらつゆのおくつままをるをみあへゝあおこづらいゝ人あ手ふれそ

補おくつき（万）九ノ卅三奥城（同）同奥城所第三（同）同ノ卅三奥城叙此（同）卅五奥津城爾（同）同卅六奥槨平

おくらゝゝ（源玉鬘）七卅筑紫まていくちをゝからぬ人々も京よりちりゞひ來るあどをたよりまつゝてよびあつめあどゝてさふらいせゝも俄まをどひ出給ひゝさわぎまに皆おくらゝゝてけれバまた人もあゝ（蜻蛉日記）中、石山まう上。での所あれゝ人ゝとおゞもる人いをなおくらゝゝさいたてあどゝ（同）一今いゝゝぎりの道まゝも我をおくらゝけゝきをたまをせ給むぬ（狭）二、下さむゝりおゞゝいりたりゝ我御身を今まをおくらゝゝ給へるゝ（同）三、五若上達部殿上人あどいさゝまおくらゝさせ給てゐるイりうらめゝさのゝいりにをれもくゝときゞひ出て（源あけまき）八十四おくらゝゝ給いゞいみゝうつらゝらんと（空穗嵯峨院）八十七俄まいでゝ大願をさてゝ申給ふ云々おくらゝゝ給ふあと（同末つむ）八隨身ゞらこそむゝゞゝき事まもあらめおくらさせ給むでまを（同せきや）三木ゝくれまゐゝゝあまり云々おくらゝゝさきまたてあどゝたれど（同夕きり）五十一心うくさまでおくらゝゝ給ふべきまやとおゞゝさり（朝野群載）二何留此老魄之身令後彼思德之二耶

おくらゝ（源わゐの紫）十「おひさゝんありゝもゝらぬわゝくさをおくらに露ぞ消んそらなき（古）離別、よみ人ゝらす「かぎりあきくも井のよそにわゝるとも人をこゝろにおくらさんやい

補おくのうを（續後拾）戀一、常磐井入道前太政大臣「尋ねてもあざゝ心をおくの海のあらき磯べいよる船もあゝ（同）同後鳥羽院「わゞさめいつらき心のおくの海まいゝかる海士のをるめゝるらん

おくのくま（檜垣嫗集）八おくの國まぞ下りまける○おくといふい大隅さつまの所あるべゝ

補おくのやまざと（拾愚）上「立ゝくにまよそめハ春のかををまて雪まぞこもるおくの山里

おくのこゝり（源わゐのあ）上、七、十八此國のおくの郡まに人もかよひがさくふゝき山あるを

年ごろもーめおきながら（宇治拾）一ノ廿四肥前の國よりてもこれいおくの郡あり

おくのえびを　奥の（夫）十三、上西門院兵衛「長月の月の有明のけーきをびおくの夷もあもれ

とや見ん

おくくらき（源わのあ）上ノ百二夕ゥげなれびさやゥならぎおくゝらきこゝちするもい

と口をー

おくまり（蜻蛉日記）三こゝい程いとゞ奥まりよたれびーびーいありきあともかさ

りりはんゥー（源みをつくー）卅四わりおくものむぢをー給ふおくまりたる人樣よて

（同花のえん）十三まゝろよくゝおくまりさるけもひい立おくれ今めゥーき事そこの

えたるわたりにて（同そー姫）卅二かやうよおくまりたらんあさりのえまさりあんこ

そをゥーゥるべき（同花のえん）七かのあたりの有樣のこよあうおくまりたるもや

と（同椎ゥ本）十三君たちもおくまりておもれ（同そー姫）廿八かくいとおくまり給へる

もことさりぞゥー

おくふゥく（源そー姫）廿三女たちのおくふゥきとおこーいづるわどひさーくありて

（同さのき）四十五おくふゥうもあらぎ皆佛よゆづり聞えさるおまー所あれびをあー

けぢのきこゝちして（榮花山）十殿の御有さまなどもおくふのく心よくゝおもーま

えをせさせ給て（源繪合）十一まづ物語のいできたりめのおやあるたけとりの翁ようつゝの俊かゞをあもせてあらそふ（日本紀竟宴歌）「波をわれわゞ日の本をたづねこーひゞりのえよのおやにざりける（源とこ夏）九人の國ゝーらぎあゝまゝこれをものゝおやとーさるまあそあめれ（同桐つぼ）三親打ぐーさーあたりて世の覺え花やのある御方〳〵まもおとらぎ（同浮ふね）十四京へおどむかへ奉らん後おたーくーて親まもみえ奉らせ給へゥー

おやども（枕）十三さのもーきもの、物おそろーきをりのおやどものかさいら

おやゞり（源澪くも）卅五常よりもおやゞりありき給ふ（同みをつくー）卅五心よまかせ

さることひきいたーつかうまつるかゝとおやゞり申給へび（同胡蝶）廿四おやがりた

る御詞もいとよくーとえ給て補（同手習）卅つひよいかゞとあん見給へ侍るとおや

ゞりていふ

○おやゞらん（源みもき）二十ふとーのうけとりおやゞらんもびんなからん

おやかた　親方（平治物）此日比やーおもれ奉るも前世の事よこそべらめ今ゝ一向

親方とたのむ也（曾我物語）三浦別當が妻ゝ曾我十郎がためにゝ姨ありけるが別當がめーつのひたるのたらひといへる女を十郎がもとへやらんとて去のゝのことを親方のいふ事也かねてゥやうの事有とゝ夢よもーらぎそう

け給いりぬといふ云々（源あけまき）卅例のゝろゝなる御あゝろざまゝ物おもい
せんあそこゝろぐるゝゝるべれおぞ親方ゝおりてきあえ給ふ

おやゝさち（源わふひ）十六親ゝさちのいとあとゞゝゝう思ひまどいるゝゞこゝろぐるゝ
う（同橋ひめ）二哀れにこゝろゞそく親ゝさちのおゞゝおきてゝりゝさまゝど思ひ出
給ふに（同わのゝ）廿八及びあきこゝろを親たちも云々（同まき柱）十二かく人のおやだ
ちもてあい給ふつらさをあんおもゞゝの給ふあれど

おやあゝ（源朝のは）十三おやあゝまふせるたひ人ともぐゝみ給へゝゝとて（推古紀）
九十ゝなてるやかたをゝ山ゝいひにゐてこやせるそのゝび人あもれおやあゝまなれ
おりれめや云々（源東や）十六おやなゝときゝああづりて

おやのいさめ（拾）戀四、よみ人しらす「ゝさらちねの親のいさめゝうたゝねゝ物おもふ時のわ
ざにぞありける（十六夜日記）ゝひあきものゝおやのいさめあり

おやのおや（源朝のは）十四「とゝふれどこの契こそわをられねおやのおやとゝいひ
ゝひとこと（拾）雜下、源重之母「おやのおやとおもゝまゝゝゝとひてまゝ吾子の子ゝゝ
あらぬあるべゝ補（月詣）雜上俊定「おやのおやのこのこのもとをうゑれゝちりゝく
までもをゝき花ゝな

おやのまもり（古）別、をのゝち「たらちねの親のまもりとあひそふるこゝろだゝり
ゝせきなとゞめそ（十六夜日記）「たちそふぞうれゝゝりける旅ごろものたゝまた
のむ親のまもりゝ

おやけあゝ（源梅のえ）三かちまけの定めあるべゝとおとゞの給ふ人の御おやゝな
き御あらそひでゝゝろあり補（源みもき）卅人のおやゝあくゝたゝゝありや

おやあ親子（源柏木）廿五親子の道のやゝそゞさる物ゝてかゝる御あゝらひの（同わ
ゝあ）上ノ九十おや子の中よりも又さるさまのちぎりゝことにこそゝふべけれとて

おやでゝろ（狹）三、下七大將のおもひもなち給へる親心もいゝあるゝ（源みをつくし）
卅四打とくべき御親でゝろゝあらぎやありけん（同こてふ）廿一いとさゝゝうある御お
やでゝろありゝゝ（同あけまき）十九今ゝまゝゝゆづる人もあくて親心にあゝづきた
てゝゝ聞え給ふ

おやさま（狹）四、上四十二ゝの母君のいゝゝまも〳〵うゝゝやすゝらん人ゝ親ざまゝあづ
けてわれゝ跡ゝえたるをゝゝまもりゝあんとの給ふなれば（源繪合）五うゝばり
ゝる親ざまゝゝきこゝめされゞと院をつゝゝきあえて

おやめき（源帚木）四十七まことに親めきてあつゝひ給ふ（同繪合）一とりもちておや

めき聞え給ふ（同をとめ）十おやめきあもれなることさへ

○おやひとところ（親所）一（源さわらひ）七おやひと所ハ見奉らざりしかば戀しきことも

おもひえぞ

補 おやど（親宿）同（万）十七、長哥妹も吾もあゝろハ於夜自たぐへれど（同）十九、十一こやあを

もこあも於夜自とこゝろはおもふものから（同）十七、四十二於夜自

補 おやをぐめ（親雀）（枕）八、二おやをぐめの虫などもてきてくゝむるもいとらうたし

おまへ（源玉葛）十九これハおまへはまゐらせ給へ（落くぼ）一こゝろのあしければな

んそのぬひさしたるハおまへぬひ給へといへばとりよせてぬひて（榮楚王夢）十と

のゝ御まへうへの御まへいまぞおろせたまふ（雄畧紀）八たれかあの事おほまへは

まをす（源夕ぎり）廿八、右近詞おまへはこそわりなく覺さるらめといへば（宇治拾）八ノ十五

その料紙ハ御まへのもとはなん云々事のやうハ御前はとひ奉れとありける（同）九ノ

十八あをぞこのお前の御料はハつねまさやげてぐしてまゐる（源うき舟）七若君の御

前はとて卯槌參らせ給ふおぼきお前の御覽せざらんぞと（同さわちひ）十九おまへ

の橋も霞へざてゝ見えもべるに

おまへちりく（源玉葛）廿七とのもおまへちりくめしつりハせ給へば（源夕ぎり）廿九お

まへちりくもえまゐらぬつゝましさはおれはしもえのぞらぜ

おまへさち（枕）五、廿例のむひぶしはおらハせ給へるおまへたちおればとてとりおろ

しまゐらひさわぐほどは（宇治拾）十四、廿五ひろさ七八分ばかりの算の有けるを一つ取

出て手はさゝゲて御前さらさいいさく笑ひ給ひてゐび給ふおよ

おまへさらぜ（源桐つぼ）四あがちまおまへさらぜもておさせ給ひしほどはおの

づからかろき方にもえしを

おまし（源のけろふ）九おましともけぢろうつりひ給ひし御てうどどもをかがらぬ

ぎおき給へる御ふをまをなどやうの物をとりいれて（同夕ぎり）五とと〳〵しらぬ

旅の御しつらひあさきやうなるおましのほどはて（同帚木）卅六もしつ方のおましは

かりなるやうはておぼとのこもれど 補（新勅）秋下、後德大寺左大臣「木のもとは又吹返ぬ唐

錦大宮人におましゝりせん

○よるのおまし（源わか紫）卅四よるのおましは入り給ひぬ（伊勢物）七十八段こよひハこ

てはさふらハんと申給ふをよろこびよるのおましはまうはせさせ給ふ

○ひるのおまし（源さのき）廿三ひるのおましはまゐさり出ておもしまに

おましところ（源帚木）卅四げはよろしきおまし所はもとて（同わふひ）廿四やうくこ

ところづよくおぼーおーて例のおまー所よ

おまー〳〵（續千）秋下今上位よつりせおまー〳〵て後云々（千載）雜中いとかーあく哀がらせおまー〳〵て（同）春下そこよおまー〳〵ける時（同）春上白川院花御覽ドにおまー〳〵けるに（同）賀そこにおまー〳〵ねる時云々 補（新後撰）春上高倉院位よおまー〳〵ける時家の梅を（同）春下位よおまー〳〵ねる時上のそのこども云々（玉葉）秋下鳥羽院位よおまー〳〵ける御前まて云々

おふ 負（宇治拾）一、廿越後の國より鮭を馬よおゐせて廿駄ぞりり（同）一ノ廿九子孫どもに家の具足どもおゐせて（万）二十、五十由伎とりおほせ山河をいたねさくて（大和物）五寺よさふときわざをるをせ奉らんといひねれいかぎりおくよろまびておもれよりり（源桐つぼ）一うらををおふつもりよやありけん（同夕のほ）廿七人をいたづらよなーつるかでとおひぬべきいいとらきあり（同わの紫）四十四をさかさ人をぬをを出とりともどきおひあん（同紅葉賀）十九人のうらをおいドおどおもふも（同よもきゝ）廿二いひーよたゞふ罪もおふべきなど（伊勢物）廿段一「つをもなき人をうけへばわを れ草おのゞうへにぞおふといふある（同）六段弓やあゞひをおひて外くちよおり（神代紀）背負千箭之靫

おふ 生（古事記）下ノ廿三もとよりいくみ竹おひををべよい（万）二ノ廿九生ざりー草おひよけるりも（和泉式部集）上「かきおで丶生ー丶髪のをぢどもよありいでぬるを見るぞかおーき 補（古）雜上忠岑「住よーとあまいつぐとも長ゐすか人ををれ草おふといふなり

おふ 追（源帚木）卅もーり出侍りぬるにおひて（神代紀）上追留之（土佐日記）て丶りーこよ追くる云々（伊勢物）廿四段ーりよ立ておひゆをどえおひつりで（万）四ノ廿三「わゞせこゞあとふをもとめ追ゆりバ木の關守いとゞめてんりも（源あのし）三道りひよてたよ人り何ぞとたよ御覽ドわくべくもあらをまづおひをらひつべきーづのを の（土佐日記）下よんべのとまりよりあとゞまりをおひてぞめく（同）上大湊よりあもものとまりをおもんとてこぎ出けり（同）同十一日曉よ舟をいざーてむろ津をおふ（同）同五日をふりらくーていづをのなどより小津のとまりをおふ（新古）別寂照上人入唐ー侍りをるに裝束おくりをるよさちけるをーらでおひてつりいーける（源あのー）六えおひもをらいを（同うき舟）九五十よきらうどうおれどかゝるあやまちーたるものをいりでりつりいんとて國の内をもおひをらいれぬ 補（源梅のえ）十御車のくるほどよおひて哥云々。オヒツキテナリ

補 おふ（万）十七、長哥九 秋されば黄葉まそひ於波勢流泉河乃（同）十八、冊五「もりぶくろ
おびつゝけあげらさとでとまてらさひあるけど人もとがめぎ（同）十七、長哥四「おびせる
かさらひ川の（同）十七、長哥四 かむあがら御名まおびせる。此方ハ負（同）九ノ廿六「こもろ
の神の於婆勢流もつせ川水尾ーたえぎゝされこれめや

おふあ〜（源桐つぼ）冊一 御あゝろにつくべき御あそびをーおふな〜おゆーいた
づく（同竹川）十四 おとゞも院のきあーー召所もあるべー玉ノ方ニテ何にりゝおふあ〜き
きいれんとおもひて（同手習）十三。尼公ノ僧都ニりぎりとこえあげらりくていきた
るわざありけりおどおふな〜おく〜の給へば（蜻蛉日記）二。道綱ノチサナキトキノリ弓射玉モノゝ玉つ所
フトコロニ母詞 いくつあんいつるかたきまゝ右近衛源中將あんあるおふな〜いふせら
れぬとてまことのあゝろまうれーうりあーきあとものにゝぎ（空穗國もつり）下ノ廿八
大宮オトゝノ北方ナリ おとーもありげほまおふあ〜子どもひきつれてあるよりらぬふみ
りきをーてかゝる事もいたー給ふ（源さわらひ）十八 いりまも〜さやうの有さまい
ものうくなんとをさまゞげなるよーきゝさまひていりでり此きこさへおふあ〜
あといづるそものうくゝもてなをべきぞ（同やどり木）八 さゞ人のさりすぎんも
あいあ〜などそーらむーゆまの給ひて中宮まもまめやりまうらを申給ふ事度りさ

かりけれべきこーめーまづらひていとやーくりくおふな〜思ひ心ざーてとーへ
給ひぬるそあやまくまのげれ聞え給ゝんもあさけあきやうならん（伊勢物）九十三「お
ふな〜思ひゝをべーなぞへなくさりきいやーきくるーりりけり（源紅葉賀）廿一 げ
まものげなりりーほどをおふあ〜〜りくものーさる心を（同とゝめ）八 右大將民部
卿などのおふあ〜〜りいらはとり給へるをあさまーうとげめ出つゝおろを（紫日
記）七十八 わりやりある君達今やううさうさふもふねまのりおほせさるをわりうぞり
ーくきあゆるに大藏卿のおふな〜〜まゞりてさすげまに聲打をへんもつゝまーきま
やーのびやりまてゐたるうーろでのをりーう見ゆれべそをの内の人もそそりまを
らふ舟の内まや老をばかこつらんといひたるをきゝつけ給へるまや（源こてふ）十三
宮大將ゝおふあ〜〜あゆざりでとを打出給ふべくもあらぎ（さゝ枕）猶行末まに大あ
る河の流出さるゝ是ぞ天龍あめり名さへおそろーくておふあ〜舟まのる 補 あふ
なといふ説もあり（新釋）云 歌ふあふすべし云々 思おふな〜〜眞本に隨分とかはるによら
れたる古意の説よろ〜一首の意ハ身分まーさげひて相應なる思ひゝをべき事也比
類せざるたりき人をいやーきものゝこふるゝかくくるーかりけりといへるなり

おふーたて（源夕ぞのは）四十六 御あさりさらぎおふーたて給ひーを

補 おとり（園大暦）春宮大夫瘧病未落居今日即發日也

補 おあたりふと（宇治拾）十一、九 かやうまそやうふまおあたりぶみをそへていざにそでまきたれるおり

おとなもん（枕）四 まざおあとのでもりたれいもやまあたりたるそらうー行いんかどらきよせてひとりねんドてあくるいとおもーかさつらたあれいひゝめくまぎ驚らせ給ひて

おとなひ（源わこの紫）四 君いおあなひー給ひつゝ（蜻蛉日記）一 さきかるそのこぞも尚 舟うあげせやかど行ふ（清輔尚齒會）よもひをさふとむる會とおあかひ侍りれる 云々 齒

（空穗 樓の上）上、五 十四 さげの院かたドけかれれど大宮の御てぐるま内侍のらみ一院のい大宮と仰らるれいうけたまもりて右のおとゞいとものやりに行ふ（源紅葉賀）四

宰相ふたり左衛門督右衛門督左右のげくのことを行ふ（同すま）十 四 とのゝことゝりおこなふべき上下さざめおりせ給ふ（同野分）五 いといらめーう吹ぬべき風まいべり云々あやふゞまんとてとらく事行ひのゝーる（榮月の宴）七 おそやれよりも御修法かど行もせ給ふ（源夕このは）卅 八 いたやのかさいらまへざてゝおこなへるあまのすまひいとあもれあり（同わふひ）廿 八 おあおあなひかれさるほうー（同わこの紫）廿 三 おあ

おひのらういつもりて（同まつ風）七 おこなひいまーたり（同このけろふ）二 こやおあおひつれゞ（後）十 八 物まこもりたるにーりさる人の局からべて正月行ひていへる（允恭紀）八、衣通郎姫「わりせこげくべきよひありさゝげねのくものおあおひこよひーるーも（古）十、墨滅 四 「わりせこげくべきよひありさゝげまのくものふるまひりねてーるーも（宇治拾）八、二 かせ杖をつきてもーりまいりておこなふなりけり

補 おこなひ（月詣）養和二年三月まぎ賀茂重保尚齒會おあなひもへりける云々（宇治拾）世のまつりをとをおあおひておん有ける

おこなひまーみ（源よもきふ）十 一 ととまぎ僧かどいかべてのいめされぎさえをぐれ行ひまーしをたふときかぎりをえらせ給ひれれゞ

おあおひつ（土佐日記）下 此間まぎ和田のとまりのありれの所といふ所ありよねいをかとこへゞおこなひつ

おこなひやつる（源手習）五十 四 げにそのさちいいとうるいーくけうらまて行ひやつれんもいとほーげまなんもべりー

おあおひゝと 行人（源わこの紫）初 かーこきおあおひ人もべり（同わこのあ）下ノ 十四 昔の世の行ひ人まやありけん

補 おでく 動（榮ねあハせ）ときなりぬと申せどとにもおでゝせ給ふ（重之集）あしたゝくものの手ひとつおちたるゲ二三日さておでくゝ「さゝゲゝのくものむさてのおでくゝな風をいのちまおもふあるべし

おこし（源夕ゝのは）四十君もしひて御心をおこして心の中ゝ佛をねんゞ給ひて（同わのし）五心をおこして（同みをつくし）十七おほやけわたくし物しづゝあるゝ思しおこしてわゝり給へり（万）十七、廿二ますらをの心ふりおこし（同）十九、十四梓弓ゆゝるふりおこし（古）序古の事をもわすれゞふりにしことゝもおこし給ふとて（續後撰）釋教前大僧正慈鎭天台座主ゝおりて勸學講といふ事をおこし行ひむべりはるをきゝてつゝいける（續千）釋教圓宗寺の法花會おこしおこなれけるゝまゝりて

補 おこしこめ（著聞）十八、五御くだものゝそまゝらせられたりはるゝおこしこめをとらせ給ひて（輔親集）くだもの遣ゝとて云々のへし「おとしより万の人のひゝひくりおもてを君ゝおこしあめあるゝ

補 おこしぎみ（馬内侍集）「おゝし火のゝそゝゝそゝゝ灰ゝらくしつゝうづゝれぬ名のこひをこゝおもへ

おこせ（和泉式部集）「われのみや思ひおこせんあぢきなく人ゝゆくへもしらぬものゆゑ（源手習）四十是ゝゝゝそゝとしらぬけゝる聲にてみおこせゝり（伊勢物）かしゝより人おこせば（源ゝゝのき）十いせまでたれゝおもひおこせん（万）十九、十二長歌紅のやしはゝそめておこせゝる衣のゝそも云々（同）十八、廿四「白玉のいそつゝどひゝ手ゝむすび於許世（オコセ）牟あまハむゝしくもあるゝ（土佐日記）上講師ものさけおこせたり（和泉式部集）下「ゝるらんを思ひおこせてふる里のこよひの月をゝれおゝむらん（源柏木）四侍從ゝもこりゝまゝ哀ある事どもをいひおゝせ給へり（拾）雜春贈太政大臣「こちふゝりゝはひおこせようめの花あるゞおしゝとてゝるゝわゝれゝ補（伊勢物）九十五段云々いひおこせたる

おこゝ（後）戀三文おどおこゝる男（大和物）六、一此きぬをゝなきやりてゝへしおこゝとて（蜻蛉日記）又々もおこゝれば（馬内侍集）文おこゝれば（源ゝゝのき）廿ゝらきゝなきのゝゝ人のをしへおゝゝるぞゝし（後）雜一俊子「我家をいつゝらしてゝならのゝをゝらしゲゝにゝゝりゝおこゝる（源玉鬘）九ふゝなど書ておこゝ補（狹）一、下物おどけゝよゝゝゝゝよゝゝとのくおこゝれば心ゝきもてゝ

おこゝ。ねている（源夕ゝのは）廿六右近をおこしゝ給ふ（同同）廿七われ人をおこさん（同同）廿八ひきおこしゝ給ふ（同橋姫）廿四おこしつる老人の出きたるゝ

おこそ　火を（源まほろし）四　うづまたる火おこしいで丶御火をけまるらに（更科日記）そびつゝ火おどおこして（拾玉）四冊一「さゆるよの枕ゝきえぬうづみ火のおこそゝおこる世をいのるゝかな

おさへ（宇治拾）八、一　いゝなる事ぞ公卿あひて禮節してくるまをおさへられば御前の隨身皆おりたるに未練のものこそあらめ以長おりざりつるゝと仰せらる（續紀）廿五七抑閉底在津流（万）廿十八　つくしの國ゝあざまもるおさへの城ぞときこしめに（源帚木）四十九　あゝろかやましければ人々さけをおさへさせてあんときこえさせよ（同夕のほ）冊四　むねをおさへて（同野分）四　そその吹あげらるゝを人々おさへて（同夕きり）十一　さうドをおさへ給へるゝいと物むゝかきかさめなれど（同やどり木）五十八　むねかんいさきしをしおさへてとのさまふをきゝ給ひてむねゝおさへたるゝくるしうもべるものそと補（万代）（玉葉）戀三西行「身のうさゝおもひしらるゝあとわりまおさへられぬゝ涙なりけり（万代）戀一、藻壁門院少將「いろまいでゝ袖のよそめゝふりもてぬいゝまおさへしし涙かるらん（玉葉）雜四惟方「いむでのみむゝしのことゝおもへどもおさへがたきゝ涙かりけり（隆信集）「ゝきくらにかみざを袖におさふればうつり香さへもくちにけるゝかな

おさへたち（とりゝへもや）三、三　姫君のものしうつくりたらんやうまてやう〳〵おさへざちをどなるがうつしきものをとゞまりて

おさへ〳〵（蜻蛉日記）二　おゞめいさしさるをどまは又おさへ〳〵とのゝしりてくる人あり

おさへてさち（空穗さのの院）七十六　生れ給ひし君のれふそくをおさへてたち給へるをいざきてありき給ふ

おさる（源桐つぼ）冊　右のおとゞの御いきをひいものまもあらもおされ給へり（榮布引）廿三　兄の大納言のさのをおされ給もんもいとをしく（源繪合）十三　ひきつくろひゝまおされるまおされて（同竹川）三　中宮のいよゝおらびおくのみ成まさり給ふ御けもひまおされて（同わかな）上ノ廿二　むゞまは末まは參り給へりし入道の宮ましばしゝおされ給ひにき（同東や）廿八　されをおまへまゝおされ奉り給ゝざめり

補　おさらべ　刑部　此訓ノヿ古事記傳三十九、十六　ニアリ

補　おさましく（相模集）長歌　のけきとのみおさましくいひもらしけるあとのもまおさふる（顯季集）「思ひあまりおつる涙をしのぶれどおさふるそでの色まいでぬる（金葉）戀下　忠隆「おさふれどあまる涙ゝもる山のかゞきまおつる雫ありけり（後拾）

戀四盛少將「かぎりぞと思ふよつきぬ涙ゝをおさふる袖もくちぬをりに（狹）二ノ上四十三

「人にれをおさふる袖もしぼるまでしぐれとともふる涙ゝを 補（新後撰）戀一、院大納言典侍

「せきゝへしおさふる袖にとしふりし人めよしらぬ泪ともがな（万代）戀一國信「なげれいづるしづくよ袖にくちもてゝおさふるゝたもおきぞゝあしき（同）同增基「つれなくておさふる袖の紅よまばゆきまでよ成にけるゝかな（同）戀四定家「いへばえよおさふる袖も朽もてぬ玉のをゝとの秋のしらべよ（金葉）戀上道經「あひをびておさふる袖やおがれいづるあみだの川のゐせきかるらん（月詣）戀上、戊全法師「いゝよせんおさふる袖もくちもてゝゝるゐたかくおつるなゝだを（千載）戀五季通「今ゝたゞおさふる袖もくちもてゝこゝろのまゝよおつる涙ゝ（新勅）戀一資賢「思ひやるかたこそなけれおさふれぞつゝむ人めよあまるなみだゝ

おき　燠（古八帖）一下「人をおもふこゝろのおきゝ身をぞやく煙たつとゝをえぬ物ゝら（伊勢物）百十五段「おきのゐて身をやくよりもゝなしきゝみやまへのわゝれかりゐり（空穗くら開下十）「おきのうへにゐるこゝちして（枕）八ノ廿六「をびつのけむりのたちけれゝゝれゝ何のけふりぞをてと仰られけれゝ見てゝへり參りて「わたつ海のおきよくがるゝ物をれゝあまのつりしてかへるかりけり（古）物名都良香「かゞれいづるかたゞよみえぬ涙川おきひゝん時やそとゝゝしられん（兼盛集）十五「あさしとゝうらみざらなんわたつうゝのてふれゝいとゞおきよかる身を 補（信明集）「手をさびよ火をけのおきやわりてけんこひしき人よあまぬてろかな

補　おきろなき　守部云　畧解に賾の字を訓る意として其次よ奥なき意也といへるゝ齟齬せり奥なきの意ならゝ於藝呂と濁音の假字ゝゝくまどきよやとゝ字書よ賾幽深難見也とも玉篇等よ隱也と釋して甚大の意とせしよを云る也按に於藝ゝ補賒などの於藝よて甚大なる一の語ときてゆさる時ゝ呂も助語よゝあらで比呂の上畧奈伎ゝ多伎の通語戀シキテ戀痛ナト云ル類多シ此例ハ鐘ノ響ニ辨ヘタリ べし欽明紀六年九月蓋聞造丈六佛功德甚大云々とあれゝいづれよも甚大の意よゝきゝまれり

おきもどめて（蜻蛉日記）二けふゝ廿三日またゝうしゝあけぬをどよある人おきもどめてつま戸をおしあけて

おきべ（古）戀一よみ「おきべよもよらぬ玉もの波のうへにをされてのをやてひわたりなん（万）六ノ十七「おきつ波へなをしづけをいさりをとふぢ江のうらよ船ぞとよめる

おきどころおき（後）戀六よみ人しらす「おきどころおき思ひとゝーきゝつれゞわれにいくらもあらゞとぞおもふ（源よもきふ）廿四かくあやゝーきよもぎのもとまゝ置所おきまで女ともも云々よろこびきこえる（後）戀六よみ人ゝーす「かぎゝらぬ思ひゝ君まあるものを置所なきこゝちこそすれ（拾）雜秋忠見「秋ごとにゝりつるいねゝつゝつれど老まける身ぞおき所なき（詞花）秋隆緣「秋のよのつゆもくもらぬ月をゝておき所おきわがこゝろゝな（源こてふ）二十四おきどころなき物おもひつきていとなやまゝうさへー給ふ

おきどころおく（源藤とのま）六思ひの外おる身のおき所おくもづゝゝーきわゆまゝーていふゝゝさおき御れもひ（古）戀四（六帖）五下「頼めこゝーことのゝ今ゝゝゝへゝーてん我身ふるれゞおき所なゝー（中務集）廿六「戀ゝーきも心づゝゝらのことおれゞおき所おくもちぞわつらふ（六帖）二「我こひゝゝくらの山まうつゝーてんゝどなき身まゝおきどこゝろなゝー（源朝のは）廿八むねのおき所なくさわきけれゞ（同初音）四おまへの山の小松ひきあそぶわゝき人々のこゝちども置所なくみゆ（同とし姫）三十九のさまひおくことのもべりゝをこゝる身まゝおき所おくいぶせく思ひ給へさゝりつゝ

おきどころもべらぎ（源桐つは）十六いとゝゝーこきゝおき所もべらぎ

おきゝへる（源末つむ）二十七松の木のおのれおきゝへりてさとこゝゝる雪も（同紅葉賀）十五ゝどよりゝ大きまおよぎけ給ひてやう〜おきゝへりなどゝー給ふ（後）戀五よみ人ゝー「うつゝまゝふせどねられぎおきゝへりきのふの夢をいつゝわそれん（空穗國もつゝり）下四十四宮ゝくびいとよくゐておきゝへりゝー給ふ

補 おきよ〜〜（榮もふゝて）廿四おとゞやゝおきよ〜〜うまませんとおこゝーさてまつらせ給へゞ（万）十六「わゞ門まゝ千とりゝーゞおくおきよ〜〜わゞひとよづま人にゝーらゆゆ（神樂）酒殿歌まゝとりゝかけろとなきぬゐりおきよ〜〜わゞひとよづま人もてそ見れ人もてそみれ

補 おきされ（小大君集）てよひゝ内のとのゐゐりおきされ（オキテアレ）てまきゑのさやまちんのつゝさゝーたるかさおそおきて

補 おきつてるゝせ（壬二）中「まゝの海や奥つもる風ふゝぬ日ゝゝをみといでぬあまのつり舟

おきつふね 沖舟っ（源まき柱）四十一「沖つふねよるべ波路またゞよゝゞさをさゝーよらんとまりをゝーへよ

補 おきつゝーは（玉葉）冬長方「奥つゝーはさゝーての磯の濵千とり風さむゝらゝー夜ともま友

よふ

おきつーらなを（沖つ白浪）（古）雜下、よみ人しらす「風ふけばおきつーら波たつさ山よもよや君がひとりてゆらん（同）戀一元カ「立りへりあもれとぞおもふよそよても人に心をおきつーら波（新古）釋教寂蓮「うき草の一葉ありともいそぐくれおもひありねそ沖つーら波

おきつーまもり（奥津島守）（土佐日記）「わが髪の雪といそべのーら波といづれまされるおきつーまもり（万）四「八百日ゆく濵のまさおもわが戀よあよまさらめやおきつ島守（和泉式部集）「あぬりよもあまりよれりなたよりあらばかぞへきりせよおきつーまもり

おきな（源帚木）四十六そのいよの翁よりハさきよそーー人ぞ（古事記）老夫オキナ（神代紀）老公オキナ（竹取）下これ物よぎりたり今ハおろーてよ翁ー得たりとのたまひて（枕）七、二翁をべいりにをてありとわらひ給ふらん補（源藤のうらと）九おきないたくゑひそゝそてむらいあればまり入ぬといひもてゝ入給ひぬ（同）廿三この水のたゝろさづねまほーけれどおきないてといみーてとの給ふ（万代）冬兼輔「とーでとにあひくるとーをかぞふれば我ハ翁よりぞーよける

補おきなた（琉球）琉球。彼國の謠歌の琉球云々おきなんてふとやまんとてふとりくつるきなら

駒よのりていたりついきさりつい○玉りつま十二八に出つ往來

おきあり（延喜式）廿一息長陵（更科日記）上あつさの山おとこえて近江國おきありといふ人の家よやどりて

おきあらべい（源夕のほ）廿三まざーらぬことなる御さびねよおきなりべいとちぎり給ふより（万）廿七十九「鳥のおきあり川いさえぬとも君よかたらんことつきめやも（天武紀）十二戰息長横河

補おきなおむな（枕）六とくきこーめーておきな女よおろーをだよたまへおど（大鏡）序れいの人よりハこよおくとーおいうたてゞなるおきなふたりおむなときあひて云々（同）國のうちよ年老たる翁おむなやあるとめーたづねて

補おきなぐさ（散木）ものへまゐりたる道よ草のふみつけられて有けるをそてよめる「そちのべよふみーたりるゝおきな草かる人もおき歎きをぞいる

おきなこと（源のけろと）五十三「女郎花そだるゝ野邊よまドるとも露のあだなを我ゆりけめや云々いとはざやりなる翁でとよくゝもべりとて（同）五十四「旅ねーて猶こゝろそよ女郎花さりりのいろようつりうつりに

おきなさび（後）雜一行平「翁さび人なとゞめそりり衣ふたりりとぞたづもなくなる

(伊勢物)百十四段哥後撰ょ同ー(千載)秋下基俊「けさこれぃさあげら霜をいさぐきておきあさびゆくーら菊の花補(万)十八、冊七「むりぶくろこれいたむりぬそりぶくろいまいえてーげおきあさびせん

○をとめさび。をの部(万)五、九

○をとこさび。との部(万)五、九

おきあび(源とこ夏)三あょとあく翁びたるこゝちーて(同このけろふ)四十いとおぞえあく翁びたてょたるこゝちー侍るを(同夕のは)廿一たゞおきあびたる聲ょぬゅづくぞきこゆる

おきあびとさち(枕)五、七年わゅき人のさるけせうのほどあれぃいひょくきょやあらんかへーもせぞそのかさとらかるおきあびとたちもうちそてつゝともーのくもいとぬを

おきうー(古)戀二、素性「もゅあくてゆめょも人を見つる夜ぃあーたの床ぞおきうゅりける

おきる(源みのり)十せんざい見給ふとてねうそくょよりる給へるを云々けふいいとよくおきる給ふめるぃ(古)雜下たいふさ「あょ竹のよあげきうへょもつ霜のおきる

て物をおもふころゅな

おきのいー沖の石(千載)戀三、二條院讃岐「我そでぃーほひにそえぬおきの石の人こそーらねゅさく間もあー(東關紀行)沖の石盥干ょむら〳〵あらもれて

おきのり(字鏡)賒於支乃利(尺素往來)貰干村酒(史記)高祖紀常從王媼武負貰酒

おきのりわざ(土佐日記)下、舟歌そらでとをーておきのりわざをーてせょもゅてこそ云々

おきぐち(紫日紀)もゅらぎのぬひものをびさることょて袖口ょおきぐちをー裳のぬひめょーろゅねの糸をふせてそのゝやうにーもくをゅざりてあやのもんょする(榮もとの事)廿八經箱ぃーたんをもて色々の玉をあやのもんぁいれてこげねのそぢをおきくちょせさせ給へりからのこんぢの錦のこもんあるをゝたてょせさせ給へり(圓融院歌合)詞書置くちーたる沈のもこ(落くは)三おきくちの經筥ょー(空穗吹上)上、四十五おきくちの衣筥ょあるげ中ょきよら夕ょ女のよそひ一具たゝそいれ(榮御賀)三袖口にぃーろげねこげねのおきくちぬひものらてんそーさり(同御着裳)七色々のおりものあやうそ物かぞいつへ重てさゞおーまきつゝきぬのたけある櫃どもょいれつゝ云々おきくちょいさまのぃりめづらーう(枕)九ノ廿九おきくちのそめ

まを塵ゐあと打捨さる樣こよなしかし（榮根合）廿三山吹のふさへおりものうゐぎふぢの唐衣もえぎの裳にゐうきぬひものしらてんしくちおきゐど補（榮日蔭のゐつち）袖まゐおきくちまてまきゐをしたり

おきまどゐを（源夕顔）四かぎをおきまどゐしもべりていとふびんかるわざおりや（古）秋下躬恒「心あてまをらむやそらんもつしものおきまどゐせるしらぎくの花（建保哥合）「しら菅のまの丶萩原朝な〳〵おきまどゐせる秋のたつしも

おきまよふ（建保哥合）四十七「おきまよふかゐをかさしく袖の月霜のまくらまを秋ゐせぞふく

おきふし（狹）四中廿二おきふしにつけて物のこおそろしく心ゐそき心ちのこし給ひて（源若紫）五十三へたておきさままおきふしかぞいえしもをまゐきを（同あふひ）十四おきふしおゐしこづらふ（古）戀二貫之「手もふれで月日へまねるしらま弓おきふしよるいいこそねられね（堀次）「くれたけの一夜ゐりをへゐつれゐおきふしやをくいやいねらるゝ

おきて（源わゐゐ）下十四五おきてひろきうつわものまいさいむひもそれましたゐひ（同うす雲）廿八たゐもとの御おきてのまゝまおほやけまつりうまつりて（同帚木）廿六其こゝろしらひおきてゐどをなん上手いいといきゐひことに（同）四十五親のおきてにさゐへりとおもひゐゐさて（同みをつくし）三十一とりくの御事ゐゐおきてさせ給ふ（同うき舟）九いとりしくいりめしくつくられて不斷の三味堂ゐゐいとたふとくおきてられさり（同わゐし）廿二海の中まもまゐりうせねとゐんおきてむべる（同桐つは）四此こうまれ給ひてのちいいと心ことにおもほしおきてされゐ（榮楚王夢）十八御をゐうゐゐ御いのりどものことおきての給むを（源をとめ）五十五水のおもむき山のおきてをあらさめて云々つくらせ給へり補（宇治拾）心のおきてとをるものなり（同）六ノ廿二大ある聲をむゐちて走りまむつておきてれゐ（著聞）十六ノ廿一高聲まおきてれゐ（源みをき）廿ともかくも思よりの給いんおきてをさゐふべきことといとよろづまおゐしけり（奥州後三年軍繪）詞千任りうべをされてものいむゐその舌をさるべきよしおきつ

おきて除（古事記）除此者無也（源匂宮）十四此君さちをおきて外にい云々（同）十六ノ六まこゝをおきていりならん佛の御國まいりやうの折ふしの心やり所を

○おきさてまつりて（源匂宮）二春宮をゐさるやんでとおきものまおき奉り給ひて帝后いみゐくりゐうし奉りりしづき聞えさせ給ふ宮なれゐ（同藤いのま）十五おと

どたちをおき奉りてさゝづきの御覺えいとやんごとなき君あり（空穗國もつり）中ノ

一七、宰相の君におき奉りてゝ政頼にくたゝくいふ人もべらまゝらば何らともかくも思ひ給へまゝ（源東や）十少將殿よりおき奉りてゝ故大將殿よりもわらくより參りつゝうまつりき

おきあげる（源夕ゝは）四あま君もおきあげりて（同）卅四日たゝくなれど起あげり給むねべ（同わゝの紫）廿九あつきゐどゝいいとゞおきもあげり給ゝぞ（同まつ風）十二物ゝなゝゞよりふゝ給へる起あげりて補（源藤はゝのま）十二日でゝあやゝくなやまゝうゝ侍れべおきあげりなどもえゝ侍らでなん（同まき柱）十五にゝゝよりおきあげりて（同野分）十九けさゝえおきあげり給ゝざりつるを

おきあゝりを（源うき舟）十六いとねぶたゝよべもをゝろよりおきあゝりゝてき

おきさわぐ（源横笛）十四此君いさく泣給ひてつゞをあぞゝ給へべめのとも起さわぎ

おきゝく（夫）九讀人しらす「今宵ゝも稻ぞに露のおきゝくゝ秋の隣よりれべかりけり

おきもの置物（源わゝの宮）上六十九おきものゝみづゝひき物ふきものなど藏人所より給ゝり給へり

増補雅言集覽卷之廿二終

增補雅言集覽

813.6-1619g-Nn
1200600630318
集約済 8冊

813.6
I619g
Nx